

群馬県前橋市

天 神 遺 跡

発掘調査報告書

昭和62年

前 橋 市 教 育 委 員 会

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



## 序 文

前橋市は、名山赤城山を北に坂東太郎で名高い利根川や萩原朔太郎をはじめ多くの時にうたわれる広瀬川が市街地を貫流し四季折々の風情にあふれ詩情豊かな県都である。

赤城山南麓、前橋台地上において縄文時代から近世、近代にかけて人々の生活の痕跡を示す遺跡、遺構が数多く存在する。

特に、古墳においては市域に800余基の存在が伝えられている。その中で東国の大古墳を代表する前橋天神山古墳を始め八幡山古墳、城南三二子古墳、天川、続社二子山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳等々の国指定史跡がある。また、山王庵寺、上野国分寺、上野国分尼寺、上野国府が本市西部に集中している。

古代において前橋は、政治、宗教、経済、文化の中心として栄え東国の奈良ともいわれる。

中世においては、戦国武将の上杉氏、武田氏、北条氏の三氏がしげをけづった地である。近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した駿河城があり歴史性豊かな街である。

天神遺跡は、推定上野国府域内に位置する。本遺跡のすぐ南側には古代の官道である東山道が通り、国府に係る遺構、遺物が発見されるものと期待される。

また、蒼海城内に入ることから蒼海城解明に役立つものとも考えられる。

調査の結果、奈良、平安時代の住居跡や井戸などの遺構が数多く発見された。遺物としては、灰釉陶器、綠釉陶器、鉄滓、ふいご口、土師器、須恵器等が発見されている。

特に、灰釉陶器、綠釉陶器においては市内の他の遺跡に比して出土量が多く注目されるところである。このことは、本遺跡が上野国府域内であるかとから上野国府解明のための一つの光を与えてくれるものと期待している。

本報告書を刊行するにあたり、物心両面から援助、協力をいただきました株式会社松清、小林工業株式会社に厚くお礼を申し上げます。また、発掘調査に際し山武考古学研究所所長をはじめ調査担当者、作業員の方々に感謝申し上げます。

本報告書が斯学の発展のために少しでも寄与できれば幸に存じます。

昭和62年1月17日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 関口 和雄



## 例　言

1. 本書は（株）松清元総社店の新築移転に伴い、事前調査された前橋市元総社町に所在する天神遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は確認調査を前橋市教育委員会が行ない、本調査を山武考古学研究所が行なった。

3. 遺跡の所在地及び調査機関・調査面積は下記の通りである。

所在地　群馬県前橋市元総社町早道831番地他

調査期間　確認調査　昭和60年11月12日～11月14日

本調査　昭和61年5月1日～6月17日

調査面積　本調査　1,600m<sup>2</sup>

4. 本調査は山武考古学研究所調査研究員伊庭彰一、折原洋一が行なった。

5. 本書作成に関して、資料の整理は郡司勝子、平山史子、福地文子の協力を得て、伊庭彰一、折原洋一が行なった。

6. 本書の編集は伊庭彰一、折原洋一が行ない、山武考古学研究所所長平岡和夫が総括を行なった。

7. 発掘調査から本書刊行に至るまで下記の機関の御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表わす次第であります。

前橋市教育委員会　株式会社松清本店　小林工業株式会社　太眞工業株式会社　株式会社大武工務所

8. 発掘作業参加者

浅見猛巳　飯塚昭子　岩田四郎　碓井フミ子　大塚みつ江　小川悦子　加藤八重子

金井福治郎　河西三明　木村本治郎　木村妙子　木村ハク　久保田光枝　駒形邦子

木暮トミ　近藤充郎　辻みつる　春山光男　原沢政雄　真庭卯平　真庭トシ

松田隆次　丸山賢次　柳原久仁江　山田義定

敬称略

## 凡　例

1. 各遺構の略称は下記の通りである。

H—住居址　D—土壙　I—井戸址

2. 遺構内出土の遺物の記号及び略称は下記の通りである。

●　土器　■　石器　□　鉄器　▲　骨片　S—石

3. 第1図は国土地理院発行の5万分の1「前橋」である。



## 本文目次

### 序文

例言・凡例

### 目次

#### 第Ⅰ章 調査に至る経緯と組織

第1節 調査に至る経緯.....1

第2節 調査の組織.....1

#### 第Ⅱ章 遺跡の立地と考古学的環境

第1節 遺跡の立地.....3

第2節 考古学的環境.....3

#### 第Ⅲ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法.....5

第2節 日誌抄.....5

#### 第Ⅳ章 検出された遺構

第1節 住居址.....6

第2節 土塙.....21

第3節 井戸址.....21

#### 第Ⅴ章 検出された遺物

第1節 出土遺物の概要.....23

第2節 住居址出土遺物.....23

第3節 土塙・井戸の遺物.....41

#### 第Ⅵ章 まとめ.....42

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図.....2

第2図 天神遺跡全体図.....4

第3図 住居址実測図（1）.....7

第4図 住居址実測図（2）.....8

第5図 住居址実測図（3）.....11

第6図 住居址実測図（4）.....12

第7図 住居址実測図（5）.....15

第8図 住居址実測図（6）.....16

第9図 住居址実測図（7）.....19

第10図 土塹・井戸址実測図	22
第11図 1・2号住居址出土遺物	24
第12図 2・3・4号住居址出土遺物	25
第13図 4・5・6・7号住居址出土遺物	26
第14図 8・9・10号住居址出土遺物	27
第15図 11・12・13号住居址出土遺物	28
第16図 14・15号住居址出土遺物	29
第17図 16・17・18号住居址出土遺物	30
第18図 19・20・21・22・23号住居址出土遺物	31
第19図 24・25・26・27号住居址出土遺物	32
第20図 28・29・30・31号住居址出土遺物	33
第21図 2・13号土塹出土遺物	41
第22図 1・2・3号井戸・14号土塹出土遺物	42

## 図 版 目 次

- 図版1 遺構
- 図版2 遺構
- 図版3 遺構
- 図版4 遺構
- 図版5 出土遺物（土器）
- 図版6 出土遺物（土器）
- 図版7 出土遺物（土器）
- 図版8 出土遺物（土器）
- 図版9 出土遺物（鉄器）
- 図版10 出土遺物（鉄器・石製品）

## 表目次

- 表1 灰釉陶器・綠釉陶器・磁器出土点数 23
- 表2 住居址出土遺物（1） 34
- 表3 住居址出土遺物（2） 35
- 表4 住居址出土遺物（3） 36
- 表5 住居址出土遺物（4） 37
- 表6 住居址出土遺物（5） 38
- 表7 住居址出土遺物（6） 39
- 表8 住居址出土遺物（7） 40
- 表9 土塹出土遺物 41
- 表10 井戸出土遺物 42

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と組織

## 第1節 調査に至る経緯

天神遺跡は、前橋市元絵社町早道・天神に所在し、推定上野国府城内に入り、中世における総社長尾氏をはじめ源訪氏・挾元氏の居城した蒼海城内に（株）松清元絵社店の新築移転が計画された。

新築移転計画は、昭和60年1月10日に移転先の埋蔵文化財の有無、発掘調査の必要性について問い合わせがあり、その後、建築予定を業者と（株）松清の担当者が調査について協力依頼に来庁した。

昭和60年2月1日、遺跡確認調査依頼が提出された。周知の遺跡地であるためどの地層から発見されるかの確認となり、開発事業者が理解を得やすいように状況証拠を見ていただくものとする。しかし、調査直前に計画変更が伝えられた。その後、3月中旬に一時開発計画の中止申し込みがあった。

昭和60年10月11日、建設予定企業の関係者が来庁し、再度、試掘調査が提出される。

昭和60年11月13日、試掘調査実施。地下60~90cmのところから、平安時代住居跡、カマド、土師、須恵器が発見された。遺跡であることを断定する。開発以前に発掘調査が必要であり、遺構の状況によっては現状保存の協力を申し入れる。

昭和60年12月13日、（株）松清本店より発掘調査依頼が提出された。その後、前橋市教育委員会、（株）松清本店、建築企業で再三協議を重ね、調査費の負担、調査時間、調査主体者、調査工程等について協議が成立した。

調査については、昭和61年4月以降とし、調査に係る重機、現場事務所、水道、電話等について現場で提供された。調査費については、（株）松清本店で負担することになった。

本調査が実施できたことは（株）松清本店、建築企業の御理解、御協力があったことを感謝申しあげます。

## 第2節 調査の組織

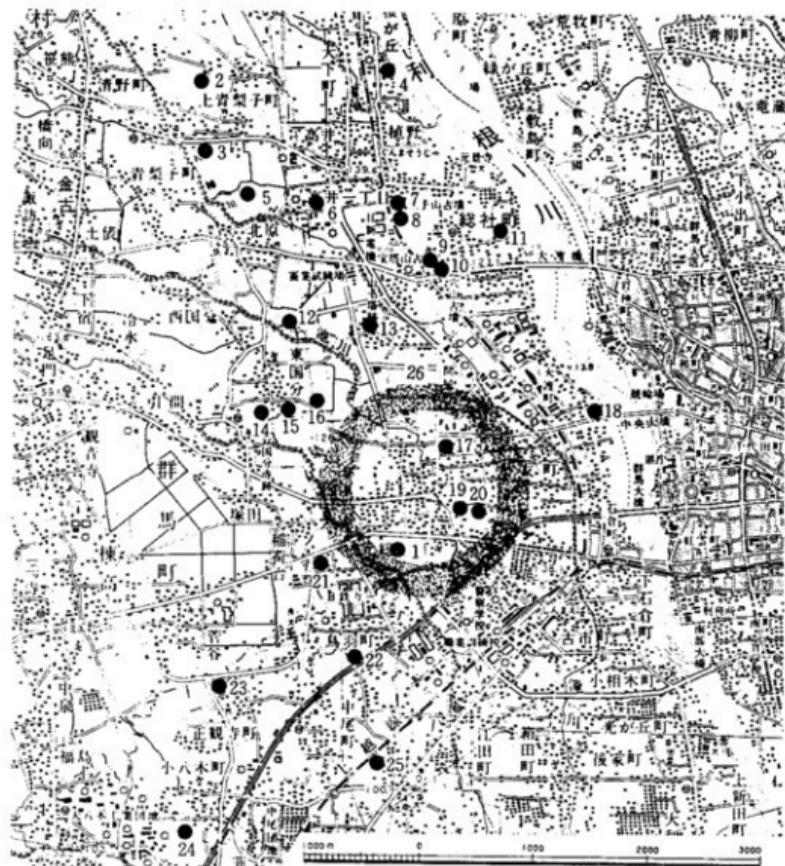
団 長 関口 和雄（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）

発掘調査指導 平岡 和夫（山武考古学研究所所長）

担 当 者 伊庭 彰一（山武考古学研究所調査研究員）

折原 洋一（山武考古学研究所調査研究員）

事 務 局 前橋市教育委員会



1. 天神遺跡
2. 庚中塚遺跡
3. 靖里南部・中島遺跡
4. 總社桜ヶ丘遺跡
5. 下東西遺跡
6. 柿木遺跡
7. 總社二子山古墳
8. 愛宕山古墳
9. 宝塔山古墳
10. 鈍穴山古墳
11. 遠見山古墳
12. 国府境遺跡
13. 山王庵寺
14. 国分僧寺
15. 国分寺中間地域遺跡
16. 国分尼寺
17. 開泉舎遺跡
18. 王山古墳
19. 元總社明神遺跡
20. 橋越遺跡
21. 鳥羽遺跡
22. 中尾遺跡
23. 正觀寺遺跡
24. 大八木遺跡
25. 日高遺跡
26. 国府堆定地域

第1図 遺跡位置図

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と考古学的環境

### 第1節 遺 跡 の 立 地

天神遺跡は前橋市元総社町に所在し、国鉄上越線新前橋駅の北西約1.2 kmの地点、利根川右岸様名山南東麓に位置する。様名山南東麓は相馬ヶ原扇状地を形成し、その南東で平坦な前橋台地へ移行する。前橋台地は、前橋市の南西部を占めており、浅間火山に発すると言われる前橋泥流堆積物が原面上をおおい、前橋市の北西部にある清里地域で様名火山東麓斜面と移行部を形成し、微地形的には多少の起伏をもっているがほとんど平坦な台地面である。本遺跡はこの前橋台地上にあり、群馬県群馬町東牛池沼に発し、元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の左岸台地上に占地する。

遺跡の東側は前橋市の中心地であり、周囲は市街地化されているが、西側には桑畠が多く残っている。遺跡の地目は桑畠であり、標高は113 mを計る。

### 第2節 考古学的環境

本遺跡は上野国府がおかれた地域にあり、古代上野国の政治、文化の中心地域であった。周辺には関係する遺跡が濃密に分布するほか、縄文時代から平安時代に至る遺跡が多くある。

縄文時代では、下東西遺跡、国分境遺跡、国分寺中間地域遺跡等がある。

弥生時代では、庚申塚遺跡、下東西遺跡、正觀寺遺跡、日高遺跡等がある。

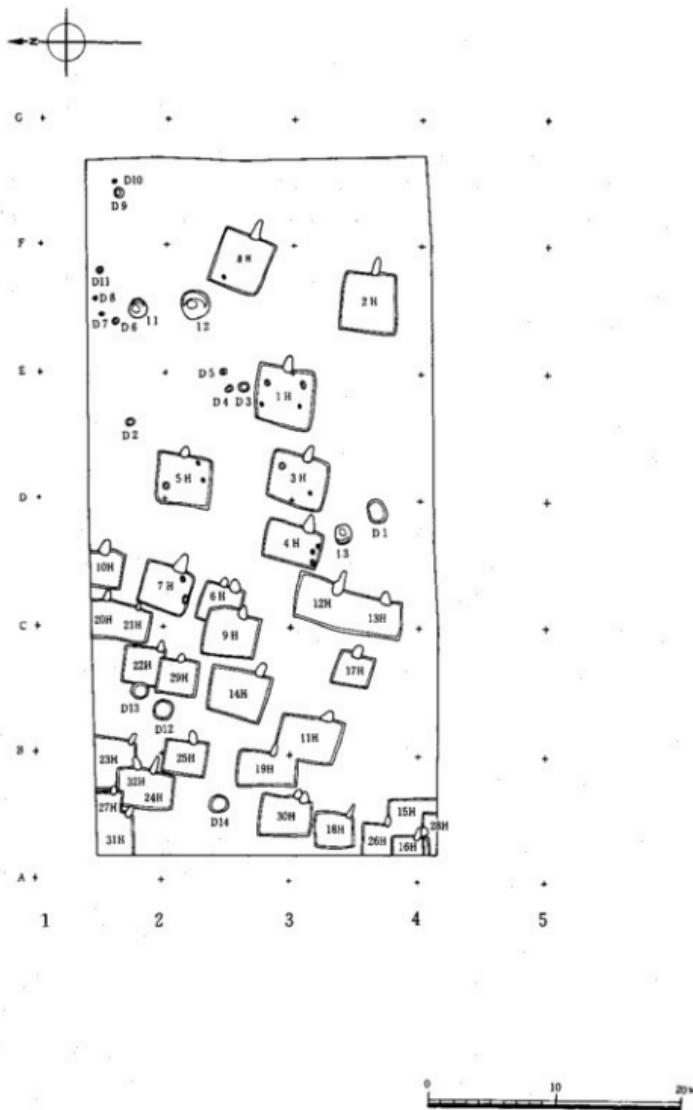
古墳が本遺跡周辺に姿を表わすのは6世紀前半で、利根川右岸の段丘上に川原石を用いて構築された積石塚である王山古墳と遠見山古墳がある。その後、遺跡の北方には總社古墳群として知られる總社二子山古墳、愛宕古墳が6世紀末から7世紀初頭にかけて、宝塔古墳、蛇穴山古墳が8世紀初頭に築造されたと考えられている。

集落址は後期を中心に点在する。閑泉橋遺跡では後期の居住址が検出されている。

奈良・平安時代になると上野国府・上野国分寺、上野国分尼寺、山王廃寺の建設が行なわれ古代上毛野の政治的、文化的中心地としての様相を帯びてくる。山王廃寺は伽藍配置は不明であるが、出土した瓦などから白鳳期の建立と考えられているほか、各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。

集落址は関越自動車道路建設に伴う発掘調査などによって、下東西遺跡、国分寺中間地域遺跡、栃木遺跡、国分境遺跡、中尾遺跡、鳥羽遺跡、元総社明神遺跡等が知られている。

奈良・平安時代にかけて、当地域では爆発的に集落が拡大し、上野国を中心地であったことを窺わせる。天神遺跡も集落址の一部であり、住居址が32軒検出されている。



第2図 天神遺跡全体図

## 第Ⅲ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

本調査は前橋市教育委員会によって行なわれた確認調査に基づいて、店舗部分1,600m<sup>2</sup>を対象に調査範囲を決定した。

調査区は10m四方のグリッドに区分して、南北方向の北から1、2……5、東西方向の西からA、B……Gとした。

住居址の調査は土層観察の為のベルトを設定して掘り下げ、充填土を記録した。土塙の調査は半截出来るものについて、土層観察を行ない充填土を記録した。井戸址は半截して掘り下げ、土層観察を行ない充填土を記録したが、危険が伴う為、調査は深さ2mまでとした。

各遺構覆土中の遺物は一括して取りあげたが、床面直上及び完形品や重要な遺物は、その出土位置を記録した。調査区内出土の遺物はグリッドごとに一括して取りあげた。

### 第2節 日誌抄

- 5月1日 本調査区の範囲決定。表土掘削を開始する。  
5月6日 表土掘削終了。調査区西側より遺構確認作業を行なう。  
5月8日 遺構確認作業終了。調査区内にグリッド設定の為の杭打ちを行なう。  
5月9日 遺跡調査開始。1~4号住居跡の堀り下げを行なう。  
5月13日 5号住居址の堀り下げを行なう。  
5月16日 6、7、9号住居址の堀り下げを行なう。  
5月17日 8号住居址、1、2号井戸址の堀り下げを行なう。  
5月19日 10、11号住居址の堀り下げを行なう。  
5月21日 12、13号住居址の堀り下げを行なう。  
5月23日 14号住居址、3号井戸址の堀り下げを行なう。  
5月27日 15~21号住居址、26号住居址、1~11号土塙の堀り下げを行なう。  
6月2日 22~25、27~29、31、32号住居址、12~14号土塙の堀り下げを行なう。  
6月6日 30号住居址の堀り下げを行なう。  
6月9日 全体写真撮影の為、調査区内の精査を行なう。  
6月10日 全体写真撮影。  
6月11日 全体測量。  
6月12日 遺物、図面、器材の整理を行なう。  
6月17日 器材等搬出を行ない、すべての発掘調査を終了する。

## 第Ⅳ章 検出された遺構

本遺跡で検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居址32軒と土塙14基、井戸址3基である。

### 第1節 住居址

#### 1号住居址（第3図 図版1）

D-2グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は東西4.6m、南北4.6m、深さ40cmを計る。

主柱穴は4本である。床面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部共によく焼けており、覆土中には焼土と炭化物を多く含む。

住居址の覆土は5層に分けられ、自然堆積を示す。一部で搅乱を受けている。

#### 2号住居址（第3図 図版1）

E-3グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西5m、南北4.3m、深さ43cmを計る。

主柱穴は確認出来なかった。床面はほぼ平坦で、壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部はあまり焼けていないが、覆土中には焼土を多く含む。カマドは住居主軸より南へ傾く。

住居址の覆土は4層に分けられ、自然堆積を示す。

#### 3号住居址（第3図 図版1）

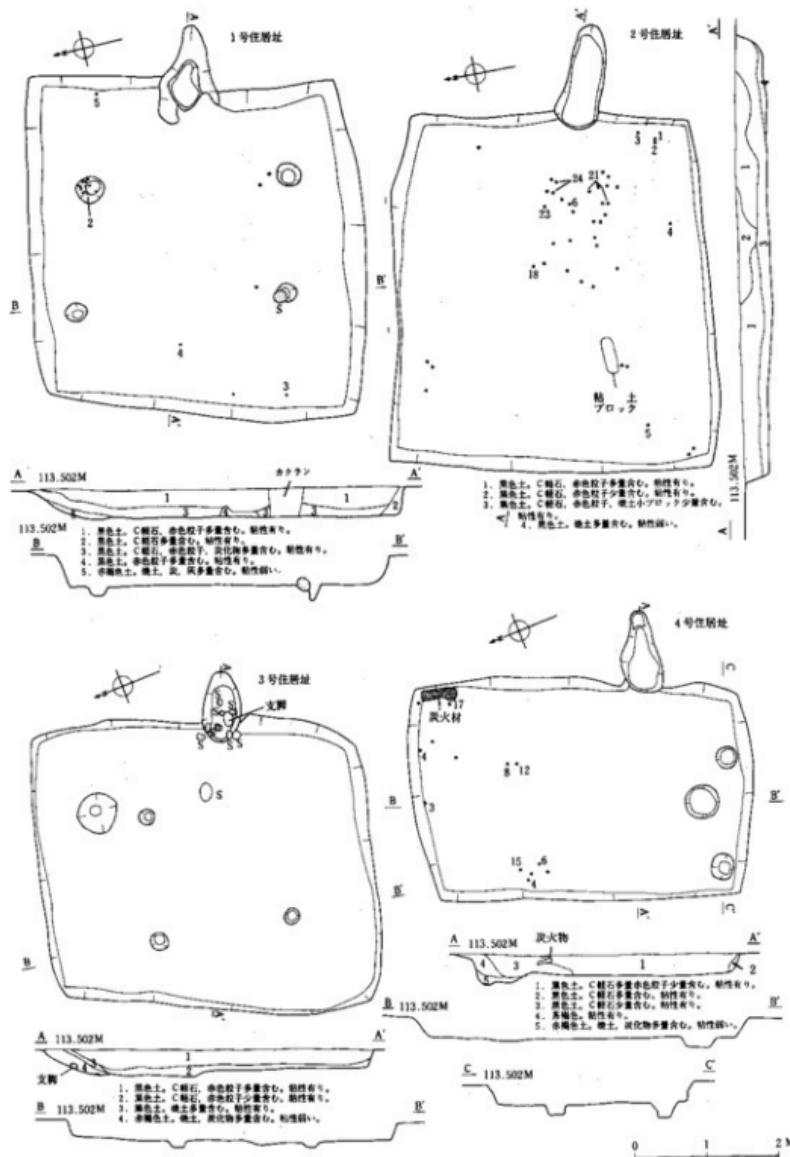
D-3グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西4m、南北4.7m、深さ30cmを計る。

柱穴は3本確認された。恐らく主穴柱は4本柱が基本となるであろう。住居址北東コーナー付近で浅いピット状の落ち込みが検出された。床面は西側でやや高くなるが、ほぼ平面である。

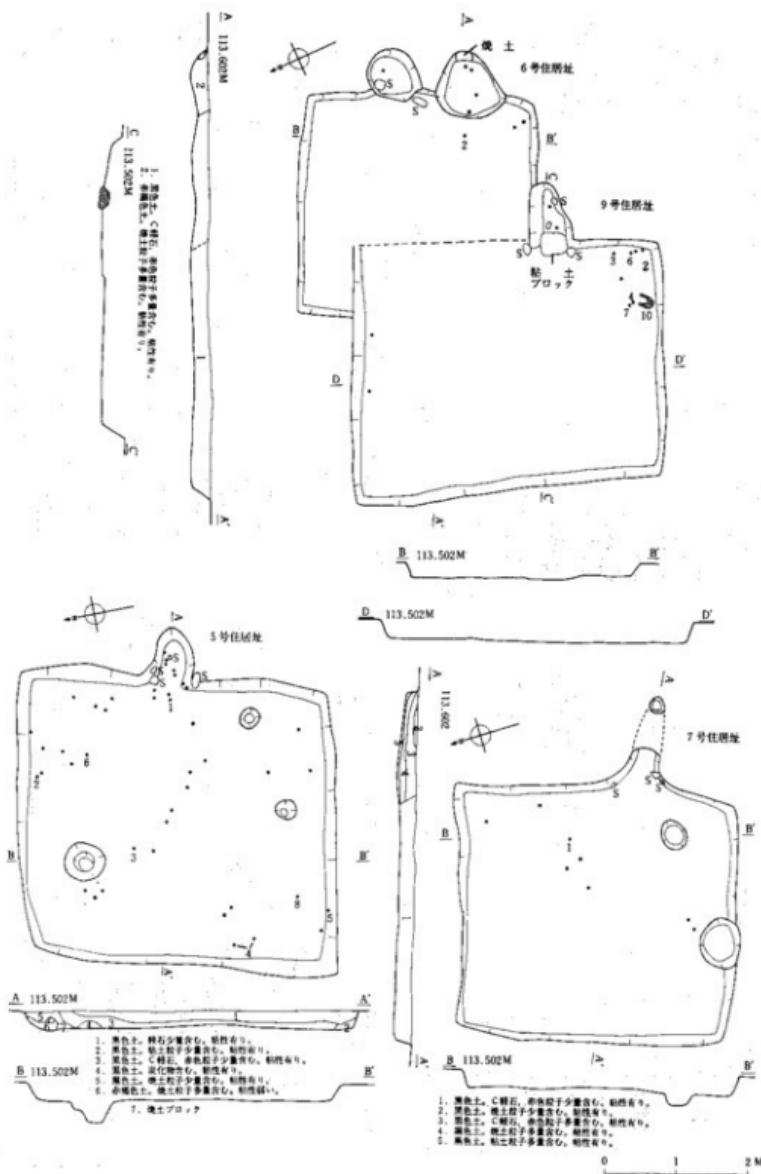
壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。袖石が残るほか、支脚と思われる石が検出された。燃焼部、煙道部共によく焼けており、覆土中に焼土と炭化物を多く含む。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す



第3図 住居址実測図(1)



第4図 住居址実測図(2)

#### 4号住居址（第3図 図版1）

C-2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西3.1m、南北4.8m、深さ30cmを計る。

柱穴は3本確認された。主柱穴は不明である。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部共によく焼けており、覆土中に焼土、炭化物、灰を多く含む。カマドは住居址主軸より若干左へ傾く。

#### 5号住居址（第4図 図版2）

D-2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西4m、南北4.5m、深さ25cmを計る。

柱穴は3本確認された。主柱穴は不明である。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。袖石が残る。燃焼部、煙道部は共にあまり焼けていないが、覆土中に焼土を多く含む。

#### 6号住居址（第4図 図版2）

C-2グリッドに位置する。本址は9号住居址に切られている。平面形は方形を呈する。規模は東西3.1m、南北3.3m、深さ25cmを計る。

柱穴は確認出来なかった。床面は住居址中央でやや低くなるほかはほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央北寄りに古いカマドが、中央南寄りには新しいカマドが位置する。いずれのカマドも壁外へ伸びる。古いカマドは燃焼部、煙道部共に焼けていないが、新しいカマドの方は共によく焼けており、覆土中に焼土を多く含む。

#### 第7号住居址（第4図 図版2）

C-2グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は東西3.7m、南北3.9m、深さ25cmを計る。

柱穴は1本だけ確認された。主穴柱は不明である。南壁の中央やや西寄りにピット状の落ち込みが検出された。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。天井部が一部残り、袖石も残る。燃焼部、煙道部は共によく焼けており、覆土は4層に分けられ、焼土を多く含む。カマドは住居主軸より若干右へ傾く。

住居址の覆土は単層である。

#### 8号住居址（第5図 図版2）

E-2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西4.6m、南北4.3m、深さ40cmを計る。

柱穴は1本確認された。主柱穴は不明である。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共によく焼けており、覆土中に焼土、炭化物、灰を含む。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

#### 9号住居址（第4図 図版2）

B-2グリッドに位置する。本址は6号住居址を切っている。平面形は長方形を呈する。規模は東西3.4m、南北4.4m、深さ30cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。両袖石が残る。焚口部に粘土ブロックがある。袖部あるいは天井部の構築に使われたものであろうか。燃焼部、煙道部は共によく焼けており、覆土中に焼土を含む。

住居址の覆土は単層で、6号住居址と明確に覆土を分けることは出来なかった。

#### 10号住居址（第5図）

C-1グリッドに位置する。北側は調査区域外になるため全掘は出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。規模は東西2.9m、南北は推定3.5m前後、深さ30cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置するものと思われる。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けていないが、覆土中に焼土を多く含む。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

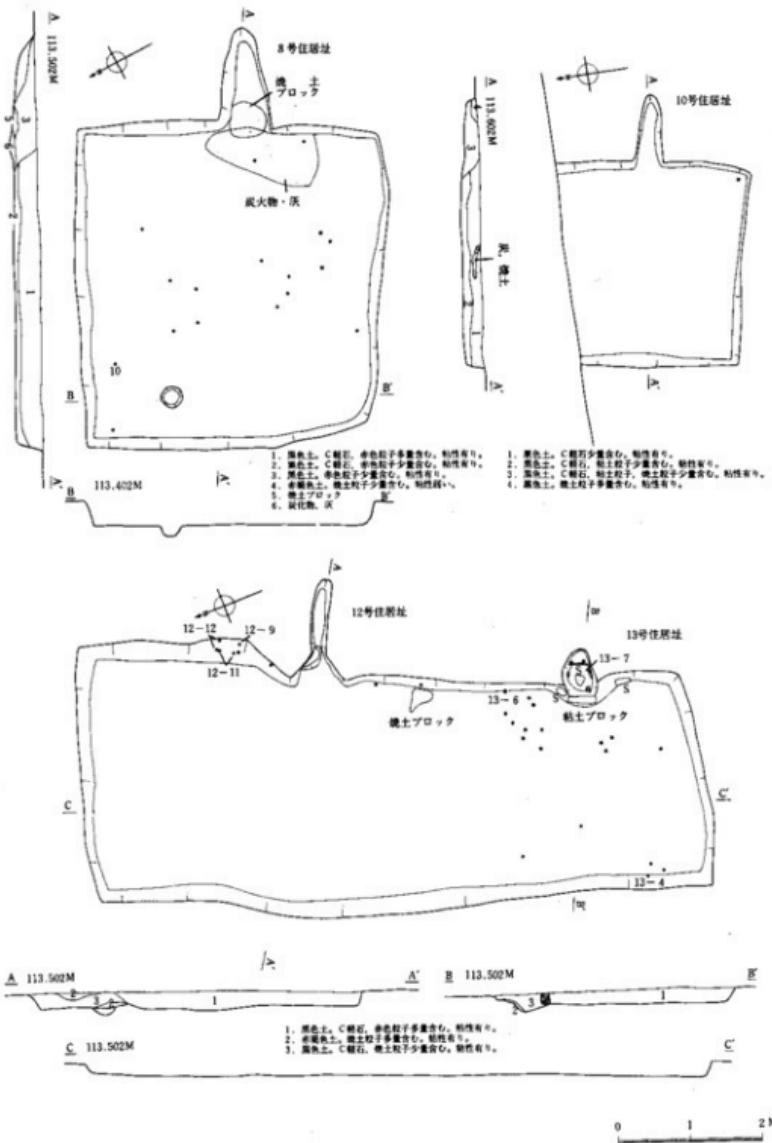
#### 11号住居址（第6図）

B-3グリッドに位置する。本址は19号住居址を切っている。平面形は長方形を呈する。規模は東西3.6m、南北4.9m、深さ15cmを計る。

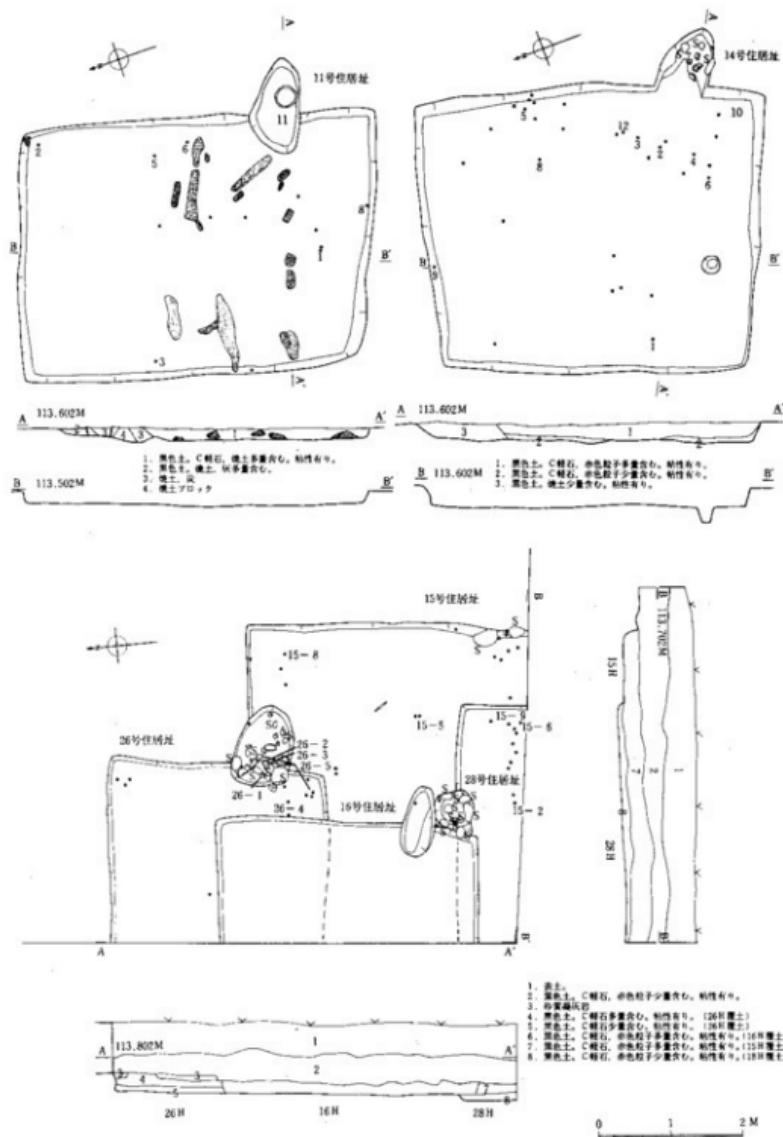
柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。床面には炭化材が散在しており、火災を受けたものと思われる。

カマドは東壁の中央南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けており、覆土中に焼土、炭、灰を多く含む。煙道部に羽釜が附設されている。

住居址の覆土は単層で、焼土を多く含んでいる。



第5図 住居址実測図(3)



第6図 住居址実測図(4)

### 12号住居址（第5図 図版2）

C-3グリッドに位置する。本址は13号住居址と重複関係にあるが、覆土から切り合い関係を確認することは出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。規模は東西3.7m、南北は推定で4.5m前後を計る。深さは20cm程で、13号住居址の床面と同じ高さである。

柱穴は確認されなかった。床面は中央でやや低くなるほかは平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置するものと思われる。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共にあまり焼けていないが、覆土中に焼土を含む。

住居址の覆土は単層で、13号住居址と同じ覆土である。

### 13号住居址（第5図 図版2）

C-3グリッドに位置する。平面形は長方形を呈するものと思われる。規模は東西3m、南北は推定で4m前後を計る。深さは20cm程である。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。袖石と支脚と思われる石が残る。焚口部は粘土ブロックで閉塞されている。燃焼部、煙道部は共によく焼けており、覆土中に焼土を含む。

住居址の覆土は単層で、12号住居址と同じ覆土である。

### 14号住居址（第6図 図版3）

B-2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西4m、南北4.7m、深さ30cm計る。

柱穴は1本検出された。主柱穴は不明である。床面は中央でやや低くなるほかは平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けでおらず、覆土中に焼土を少量含む。カマドは住居主軸よりやや右へ傾く。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

### 15号住居址（第6図）

A-3グリッドに位置する。本址は16号、26号、28号住居址と重複関係にある。新旧関係は古い住居址から28号、15号、26号、16号住居址の順である。本址は南側が調査区域外に伸びるため全掘は出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。深さは確認面から25cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは検出出来なかったが、恐らく東壁の南寄りに位置するものと思われる。

住居址の覆土は単層である。16号、26号住居址の床面は本址とはほぼ同レベルであるが、28号住居址の床面は本址より低くなる。

#### 16号住居址（第6図）

A-3グリッドに位置する。本址は西側が調査区域外に伸びるため全堀は出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。規模は南北3.6m、深さは確認面から20cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けていない。カマドは住居主軸より若干右へ傾く。

住居址の覆土は単層である。覆土から本址は15号、26号、28号を切っていることが確認できる。

#### 17号住居址（第7図）

B-3グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西2.5m、南北3m、深さ20cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けており、覆土中に焼土を多く含む。袖石が残るほか、焚口部は瓦で閉塞されている。

住居址の覆土は単層である。

#### 18号住居址（第7図 図版3）

A-3グリッドに位置する。平面形は方形を呈する。規模は東西3.3m、南北3.2m、深さ25cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南隅に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けており、覆土中に焼土を多く含む。カマドは住居主軸よりや右へ傾く。

住居址の覆土は2層分けられ、自然堆積を示す。

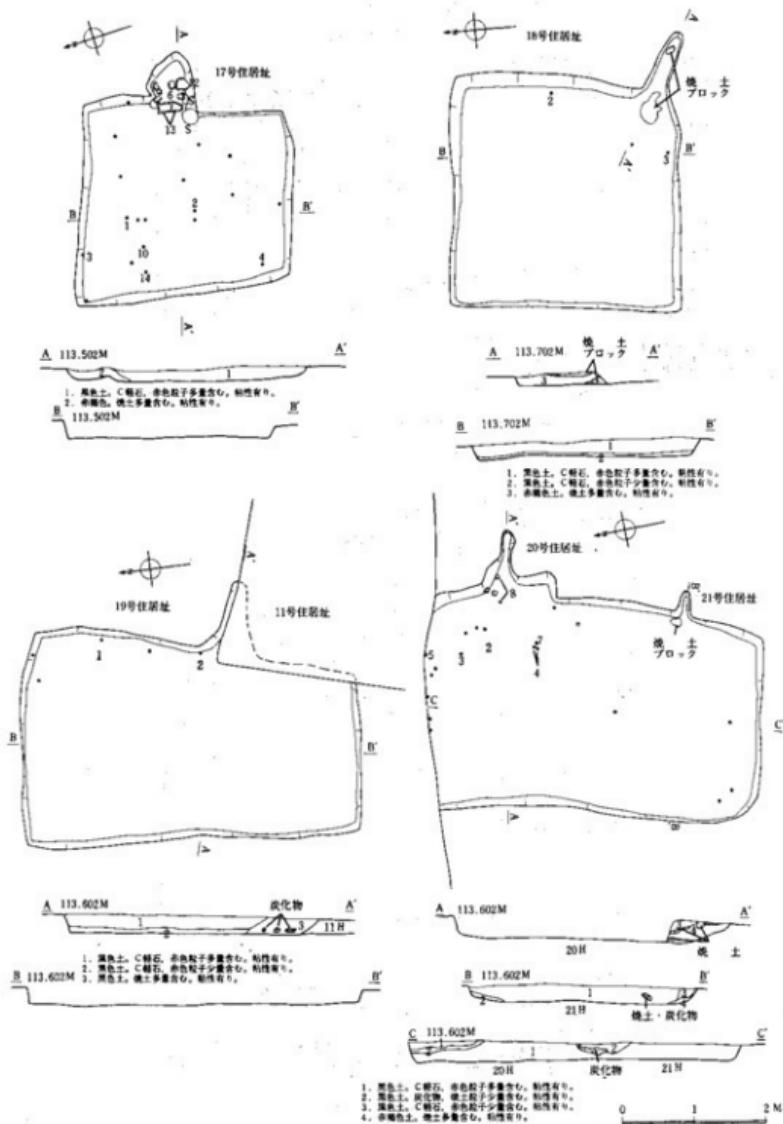
#### 19号住居址（第7図）

B-2グリッドに位置する。本址は11号住居址に切られている。平面形は長方形を呈する。規模は東西3m、南北4.7m、深さ25cmを計る。

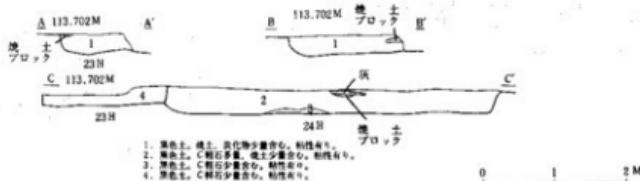
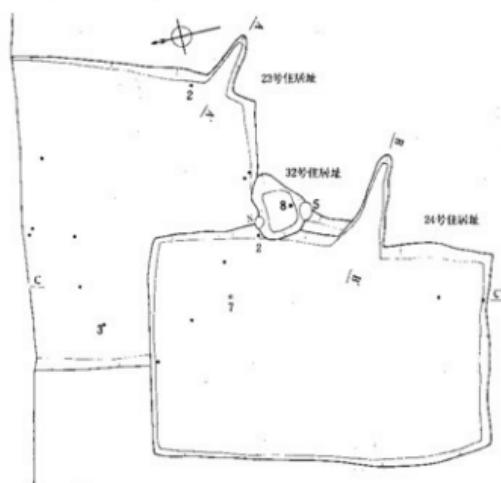
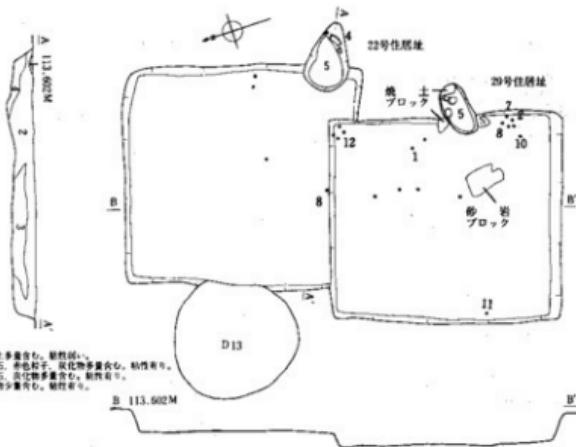
柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁のやや南寄りに位置するが、11号住居址に切られている。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けており、覆土中に焼土、炭化物を含む。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。



第7図 住居址実測図(5)



第8図 住居址実測図(6)

### 20号住居址（第7図）

B-1グリッドに位置する。本址は21号住居址と重複しているが、切り合い関係は不明である。本址は北側が調査区域外に伸びるため全堀は出来なかった。平面形は方形に近いプランを呈するものと思われる。規模は東西3m、深さ25cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は21号住居址と同一レベルにある。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けしており、覆土中に焼土を多く含む。

住居址の覆土は2層に分けられる。21号住居址と同じ覆土である。

### 21号住居址（第7図）

B-1グリッドに位置する。本址は20号住居址と重複している。平面形は方形を呈するものと思われる。規模は東西3m、深さ25cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は中央でやや高くなるほかは平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁のやや南寄りに位置する。煙道は壁外へ伸びる。燃焼部、煙道部は焼けていないが、覆土中に焼土を含む。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

### 22号住居址（第8図 図版3）

B-1グリッドに位置する。本址は29号住居址と重複している。本址は29号住居址を切って造営されている。平面形は方形を呈する。規模は東西3.2m、南北3.3m、深さ35cmを計る。本址の西壁は13号土塙によって一部切られている。

柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南隅に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けておらず、覆土中に炭化物を少量含む。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

### 23号住居址（第8図 図版3）

A-1グリッドに位置する。本址は24号、32号住居址と重複関係にある。古い方から32号、24号、23号住居址の順に造営されている。本址の平面形は北側が調査区域外に伸びており、全堀出来なかつたため不明である。規模は東西4.4m、深さ15~25cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南隅に位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けていないが、覆土中に粘土を多く含む。カマドは住居主軸よりやや右へ傾く。

住居址の覆土は単層である。

#### 24号住居址（第8図 図版3）

A-1グリッドに位置する。本址は32号住居址を切っており、23号住居址に切られている。平面形は長方形を呈する。規模は東西3.1m、南北4.7m、深さ35cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けていないが、覆土中に焼土を多く含む。カマドは住居主軸よりや右へ傾く。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

#### 25号住居址（第9図）

A-2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西2.7m、南北3.5m、深さ30cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共によく焼けており、覆土中に焼土を多く含む。左側の袖石が残る。

住居址の覆土は単層である。

#### 26号住居址（第6図）

A-3グリッドに位置する。本址は15号住居址を切っており、16号住居址に切られている。西側が調査区域外に伸びるために全堀は出来なかったが、平面形は長方形を呈する。規模は南北3m、深さは確認面から35cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共にあまり焼けていないが、覆土中に焼土、炭化物を含む。袖石が残る。

住居址の覆土は3層に分けられ、自然堆積を示す。

#### 27号住居址（第9図）

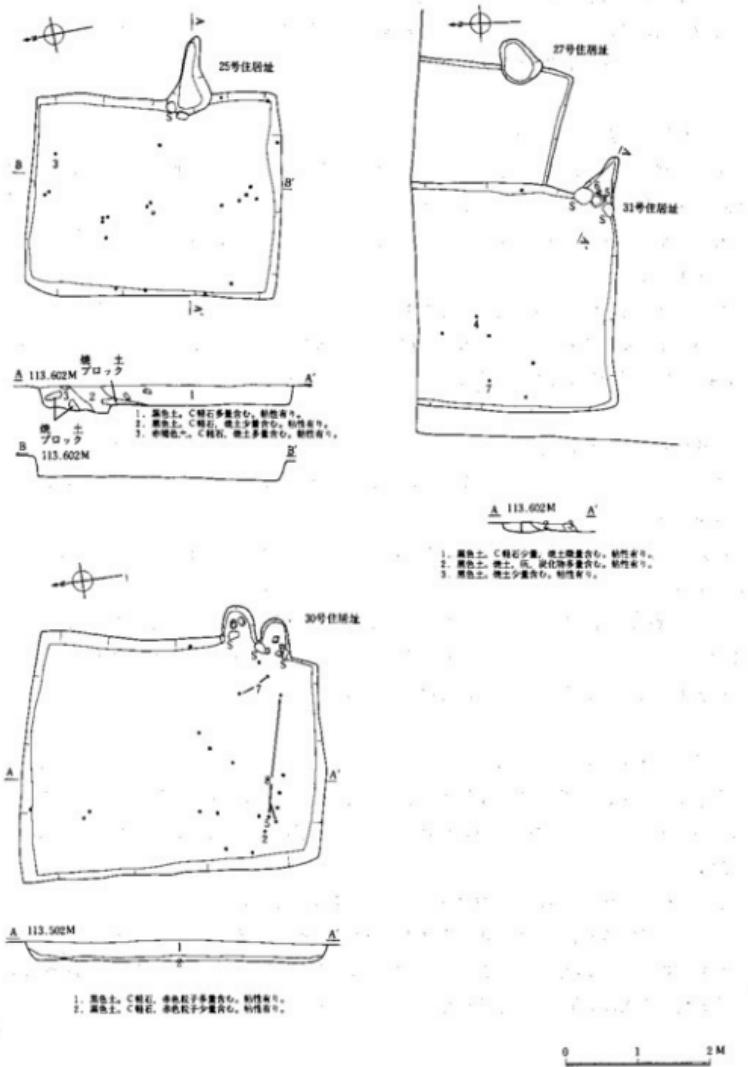
A-1グリッドに位置する。本址は31号住居址に切られている。北側は調査区域外に伸びるために全堀出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。深さは20cmを計る。

カマドは東壁の南隅に位置する。煙道は壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は焼けていない。

住居址の覆土は単層である。

#### 28号住居址（第6図）

A-4グリッドに位置する。本址は15号、16号住居址に切られている。南側は調査区域外に



第9図 住居址実測図(7)

伸びるために全掘出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。深さは確認面から40cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは北壁の中央から東寄りに位置するものと思われる。燃焼部は焼けている。袖石が残る。住居址の覆土は単層である。

#### 29号住居址（第8図 図版3）

B-2グリッドに位置する。本址は22号住居址に切られている。平面形は長方形を呈する。規模は東西2.9m、南北3.3m、深さ35cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面には若干の凸凹があるもののほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。煙道は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部は共に焼けおり、焼土ブロックが残る。右側の袖石が残る。カマドは住居址主軸よりやや左側へ傾く。住居址の覆土は単層である。

#### 30号住居址（第9図 図版3）

A-2グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。規模は東西3.3m、南北4.3m、深さ30cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面には若干の凸凹があるもののほぼ平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南隅に位置する。左右に2基あるが、新旧関係は不明である。煙道は壁外に伸びる。両カマド共に燃焼部、煙道部は焼けていない。右側のカマドは袖石が残る。

住居址の覆土は2層に分けられ、自然堆積を示す。

#### 31号住居址（第9図 図版3）

A-1グリッドに位置する。本址は27号住居址を切っている。北側は調査区域外に伸びるために全掘出来なかった。平面形は長方形を呈するものと思われる。規模は東西3.2m、深さ20cmを計る。

柱穴は確認されなかった。床面は平坦である。壁はなだらかに立ちあがる。

カマドは東壁の南隅に位置する。煙道部は長く、壁外に伸びる。燃焼部、煙道部共に焼けておらず、覆土中には焼土、炭化物、灰を含む。カマドは住居主軸より右へ傾く。袖石が残る。

住居址の覆土は単層で、27号住居址と同一覆土である。

#### 32号住居址（第8図）

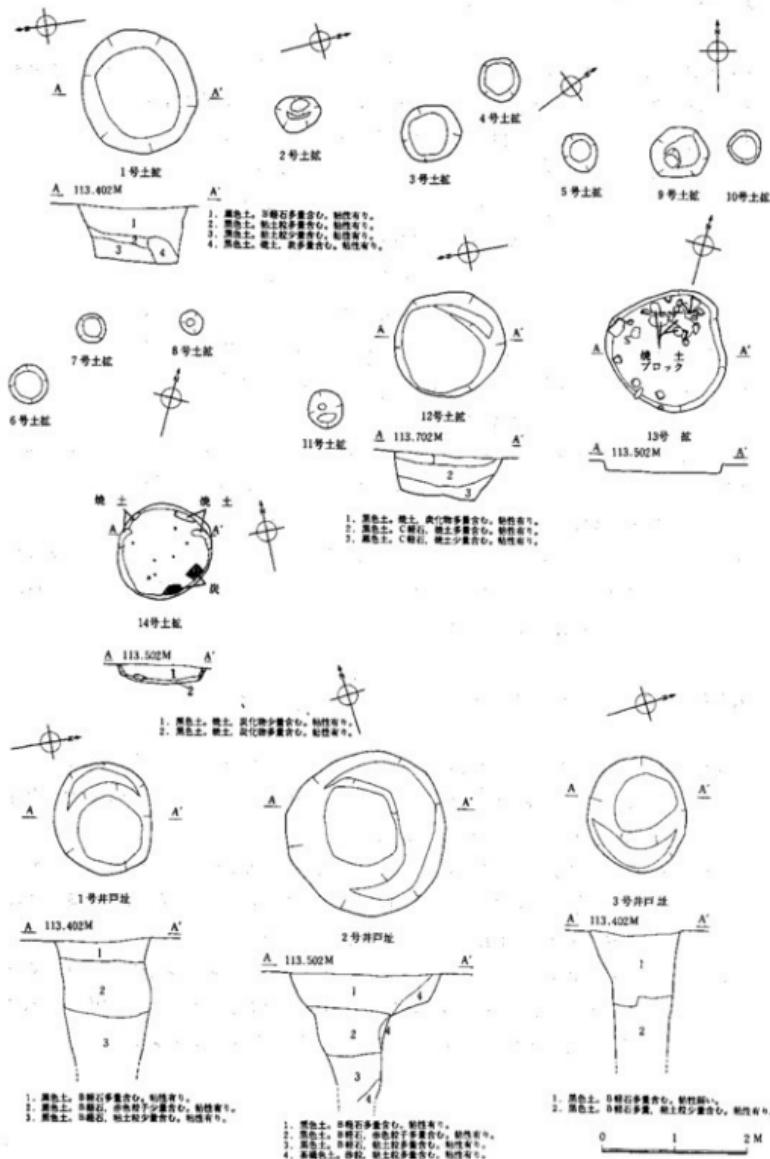
A-1グリッドに位置する。プランは不明で、カマドだけが確認された。両袖石が残る。

## 第2節 土 塚 (第10図 図版4)

- 1号土塚 C-3グリッドに位置する。平面形は $1.75\text{m} \times 1.55\text{m}$ の円形を呈する。深さ75cm。
- 2号土塚 D-1グリッドに位置する。平面形は $65\text{cm} \times 55\text{cm}$ の梢円形を呈する。
- 3号土塚 D-2グリッドに位置する。平面形は $85\text{cm} \times 80\text{cm}$ の円形を呈する。
- 4号土塚 D-2グリッドに位置する。平面形は $60\text{cm} \times 60\text{cm}$ の円形を呈する。
- 5号土塚 E-2グリッドに位置する。平面形は $55\text{cm} \times 50\text{cm}$ の円形を呈する。
- 6号土塚 E-1グリッドに位置する。平面形は $55\text{cm} \times 55\text{cm}$ の円形を呈する。
- 7号土塚 E-1グリッドに位置する。平面形は $40\text{cm} \times 40\text{cm}$ の円形を呈する。
- 8号土塚 E-1グリッドに位置する。平面形は $30\text{cm} \times 30\text{cm}$ の円形を呈する。
- 9号土塚 F-1グリッドに位置する。平面形は $80\text{cm} \times 70\text{cm}$ の梢円形を呈する。
- 10号土塚 F-1グリッドに位置する。平面形は $45\text{cm} \times 45\text{cm}$ の円形を呈する。
- 11号土塚 E-1グリッドに位置する。平面形は $53\text{cm} \times 51\text{cm}$ の円形を呈する。
- 12号土塚 B-1グリッドに位置する。平面形は $1.55\text{m} \times 1.50\text{m}$ の円形を呈する。深さ60cm。
- 13号土塚 B-1グリッドに位置する。平面形は $1.75\text{m} \times 1.70\text{m}$ の不整円形を呈する。深さ12cm、塙底には粘土ブロックが残る。遺物が多量に出土。
- 14号土塚 A-2グリッドに位置する。平面形は $1.35\text{m} \times 1.30\text{m}$ の円形を呈する。深さ30cm。  
壁は焼けしており、塙底には粘土、灰、炭化物が残る。遺物が多量に出土。土師器ガマの可能性が考えられる。

## 第3節 井戸址 (第10図 図版4)

- 1号井戸址 E-1グリッドに位置する。平面形は $1.55\text{m} \times 1.35\text{m}$ の梢円形を呈する。西側にテラス状の段が掘られる。壁はなだらかに立ちあがる。覆土中にB軽石を含む。下層になるほど粘性が強くなる。
- 2号井戸址 E-2グリッドに位置する。平面形は $2.3\text{ m} \times 2.2\text{ m}$ の円形を呈する。東側にテラス状の段が掘られる。壁はなだらかに立ちあがり、上部で開く。覆土中にB軽石を含む。下層になるほど粘性が強くなる。
- 3号井戸址 C-3グリッドに位置する。平面形は $1.6\text{ m} \times 1.45\text{ m}$ の梢円形を呈する。東側にテラス状の段が掘られている。壁はなだらかに立ちあがるが、南側の上部は開く。覆土中にB軽石を含む。下層になるほど粘性が強くなる。



第10図 土塚・井戸址実測図

第V章 検出された遺物

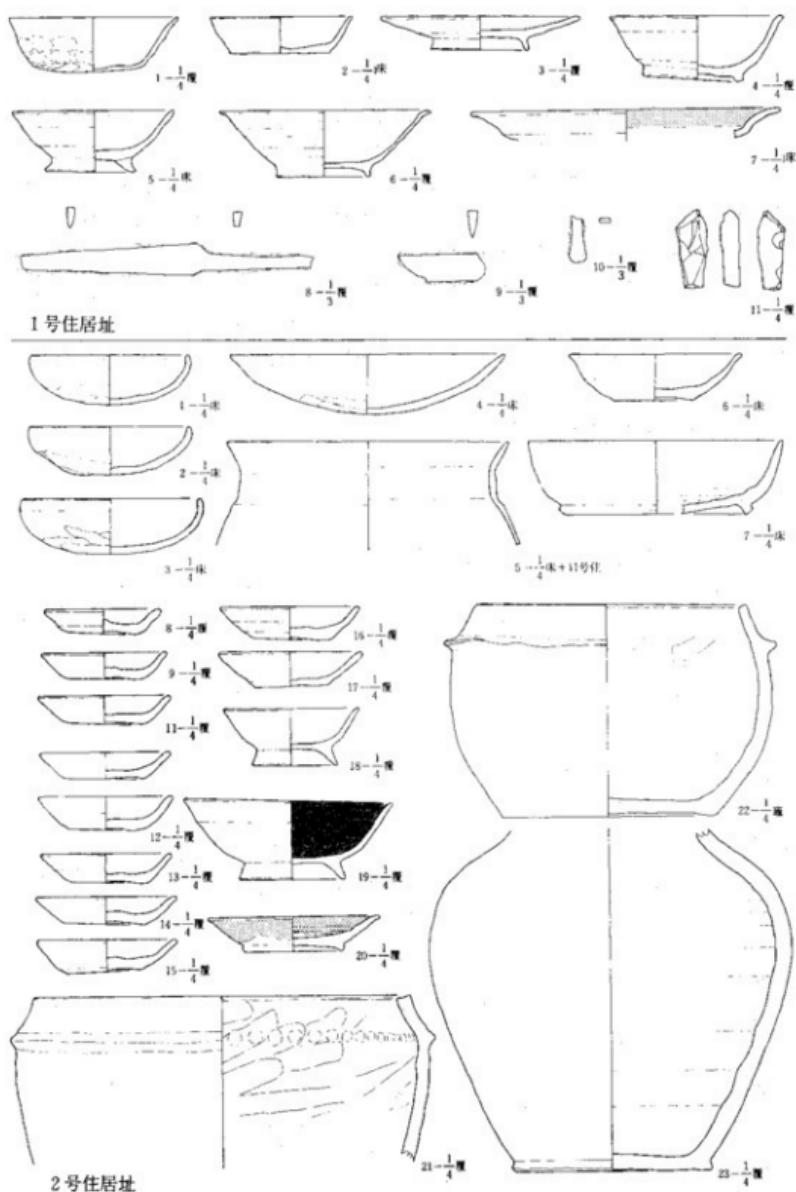
## 第1節 出土遺物の概要

今回の調査では、平安時代の遺構・遺物が主体となっており、その他の時代の遺物は極めて少量しか認められず、古墳時代後期および奈良時代の遺物が若干検出されたにすぎない。

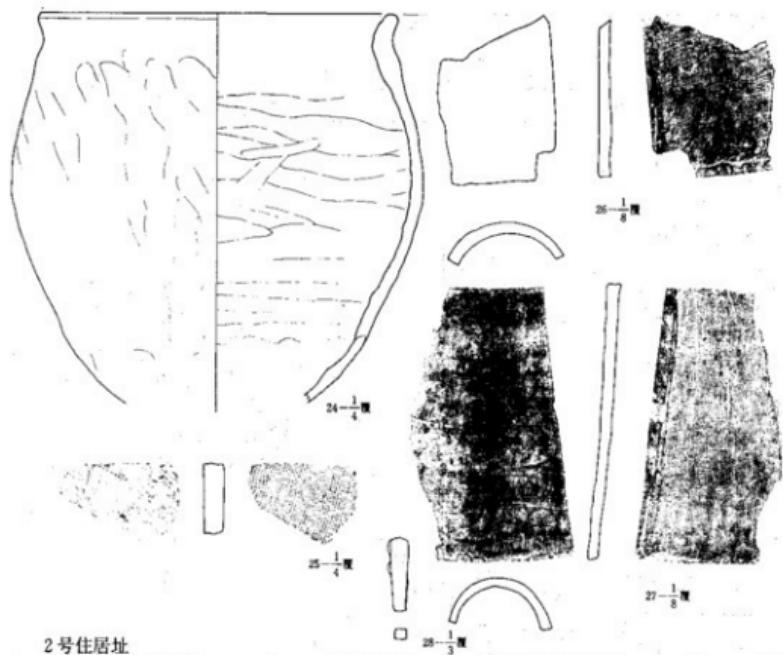
平安時代の遺物は時期的に初期から末期までの長期に亘り存在している。その内容は土師器、須恵器、灰釉陶器、土製品、石製品といった普遍的に出土する遺物群を初めとして、綠釉陶器、青磁、白磁、銅鏡と言ったような当時において高価な品々と思われる遺物群も存在し、多種多様な様相を示している。また、遺物出土量は、遺構内よりコンテナバットにして31箱、遺構外よりコンテナバットにして16箱となり甚大な量と言える。中でも、表1に示したように灰釉陶器、綠釉陶器、青磁、白磁等は他の一般的な集落に比較して異状なほどの出土量と言え、さすがに国府域内に存在が推定される遺跡であるといえる。本報告では紙数の都合上、検出された遺物群中の遺構内出土遺物のみ報告する。

## 第2節 住居址出土遺物

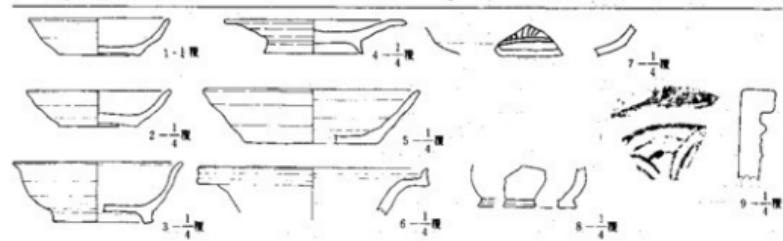
表1 灰釉陶器、綠釉陶器、磁器土点数（破片数）



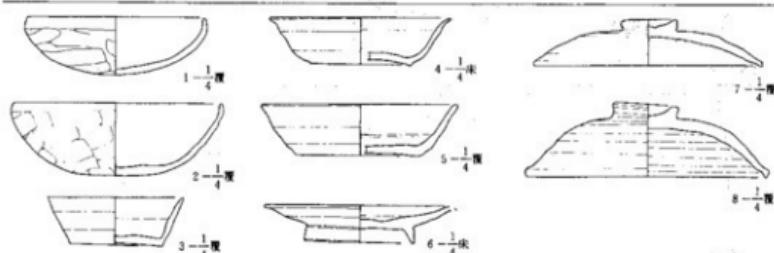
第11図 1・2号住居址出土遺物



2号住居址

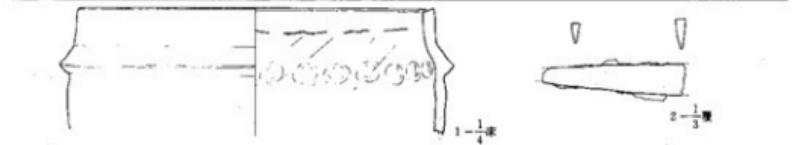
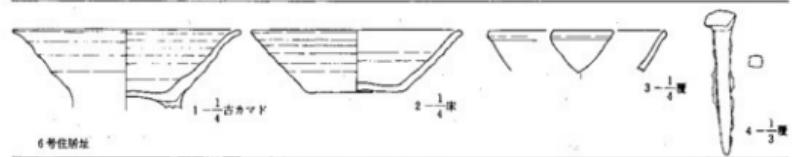
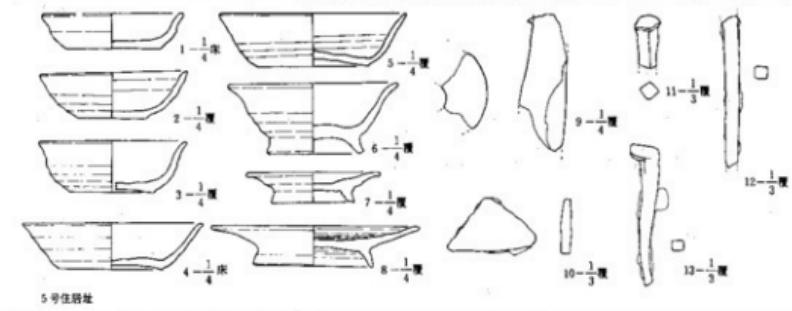
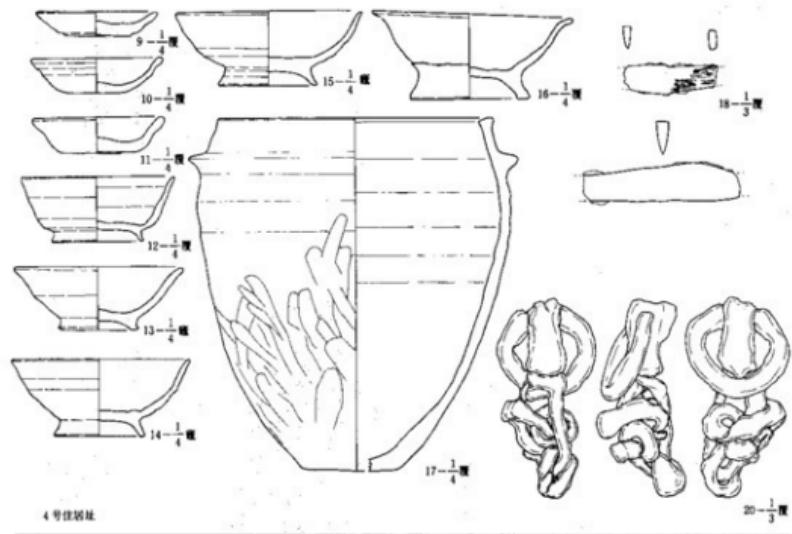


3号住居址

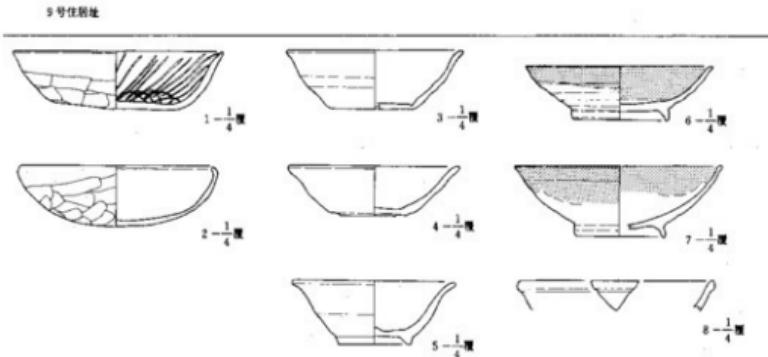
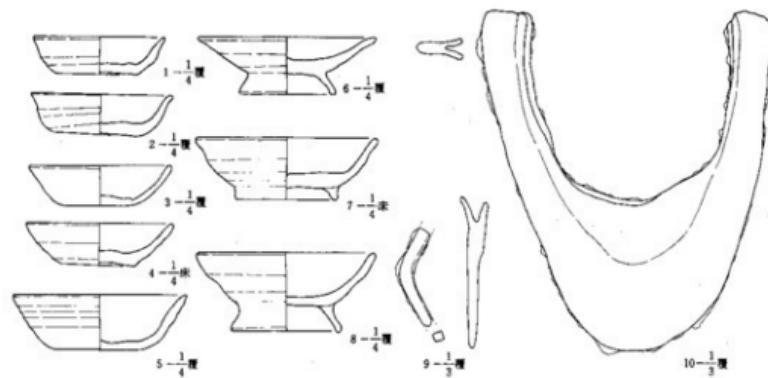
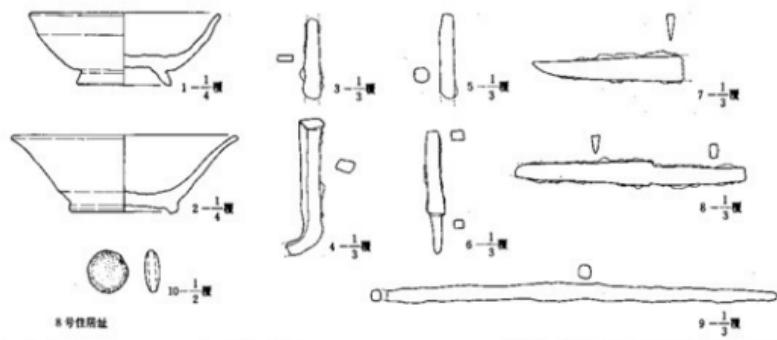


4号住居址

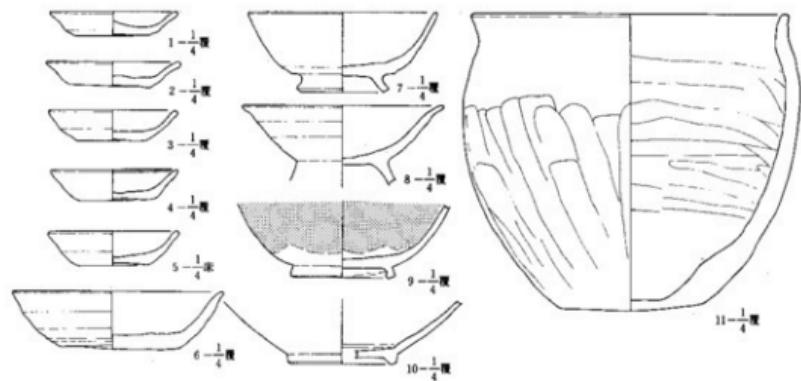
第12図 2・3・4号住居址出土遺物



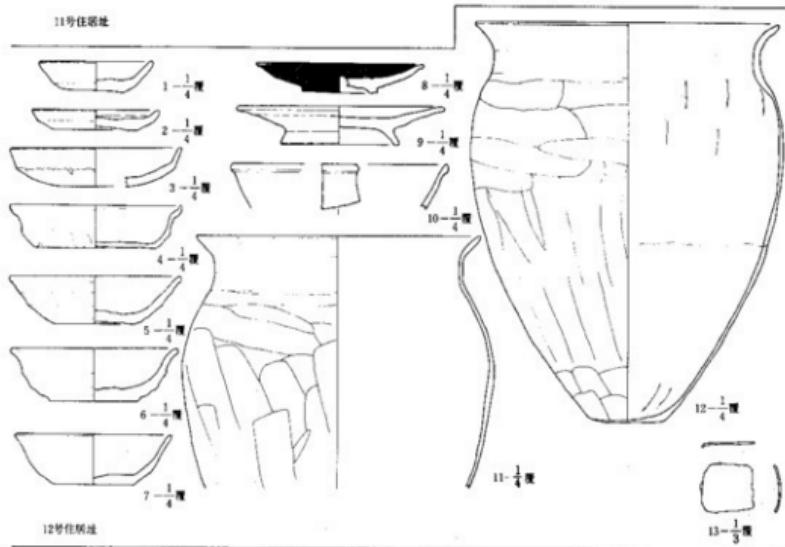
第13図 4・5・6・7号住居址出土遺物



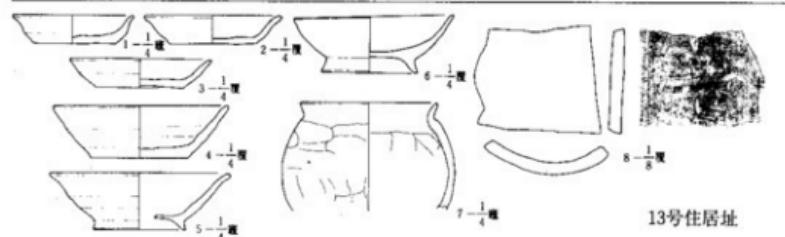
第14図 8・9・10号住居址出土遺物



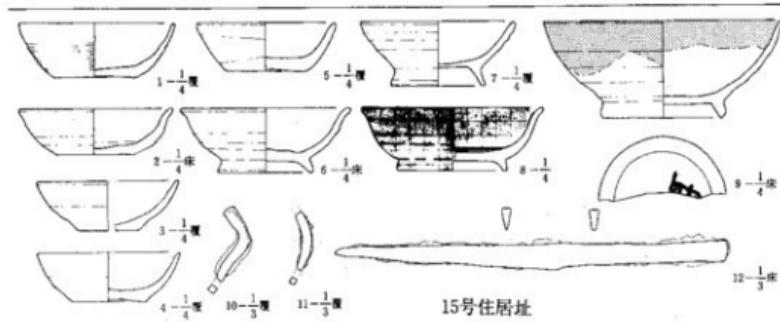
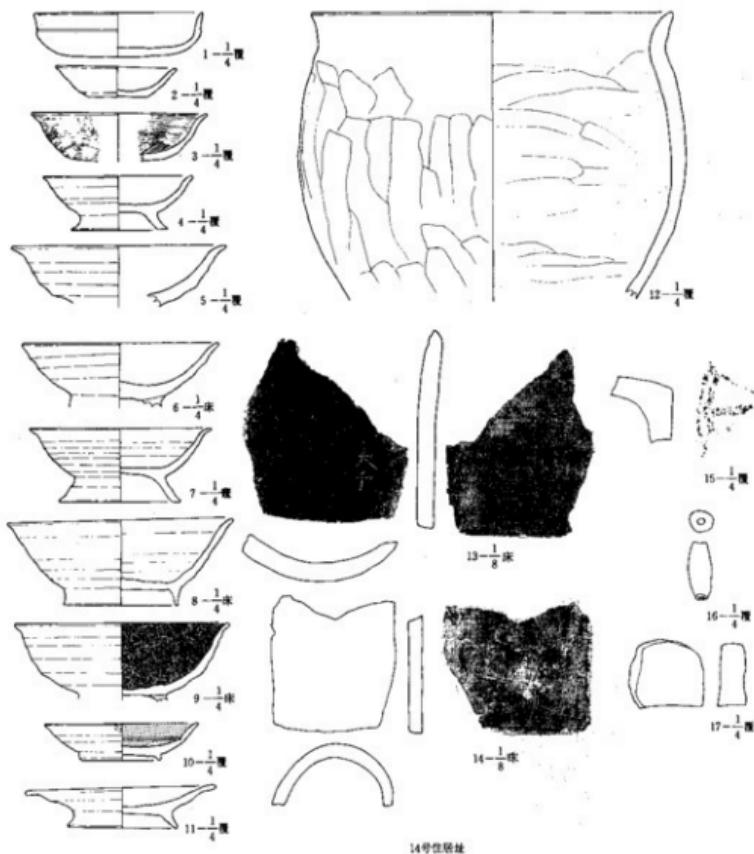
11号住居址



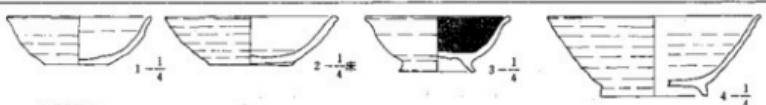
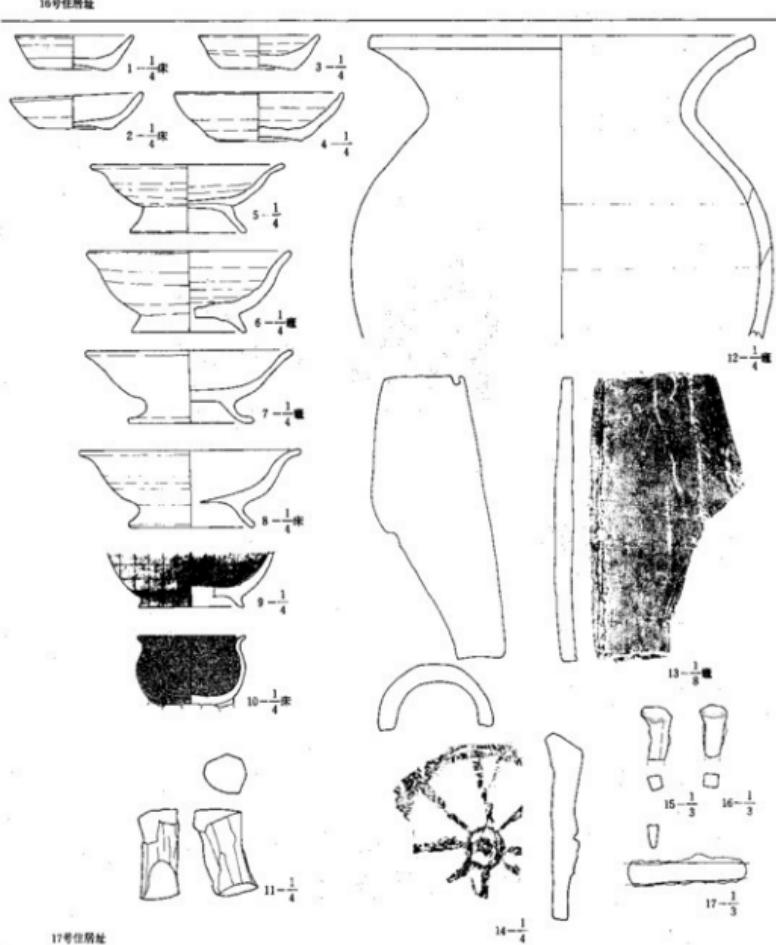
12号住居址



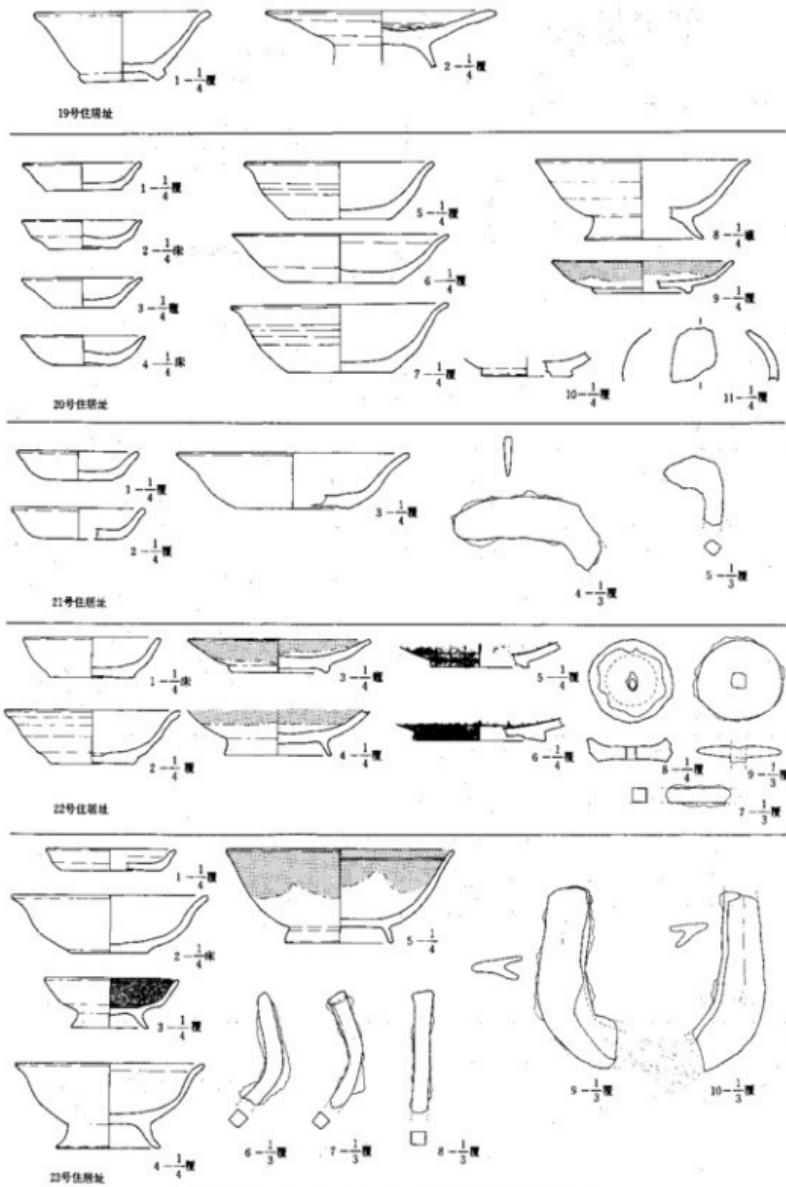
第15図 11・12・13号住居址出土遺物



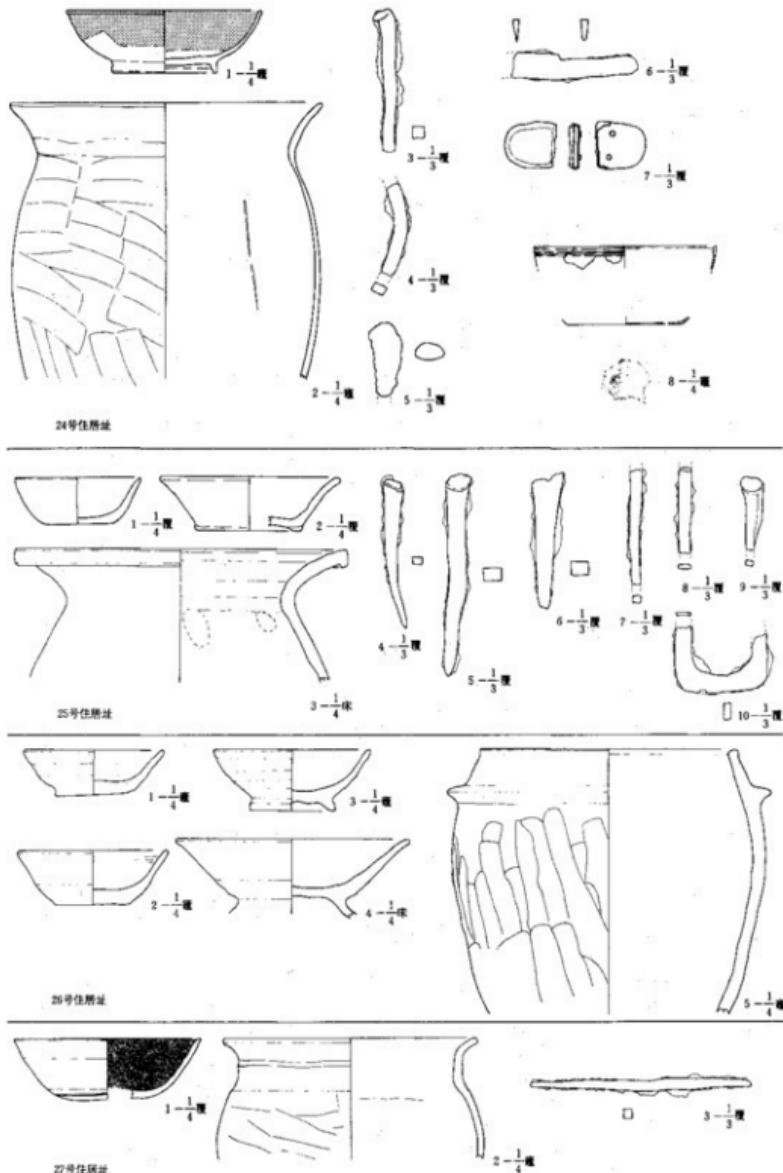
第16図 14・15号住居址出土遺物



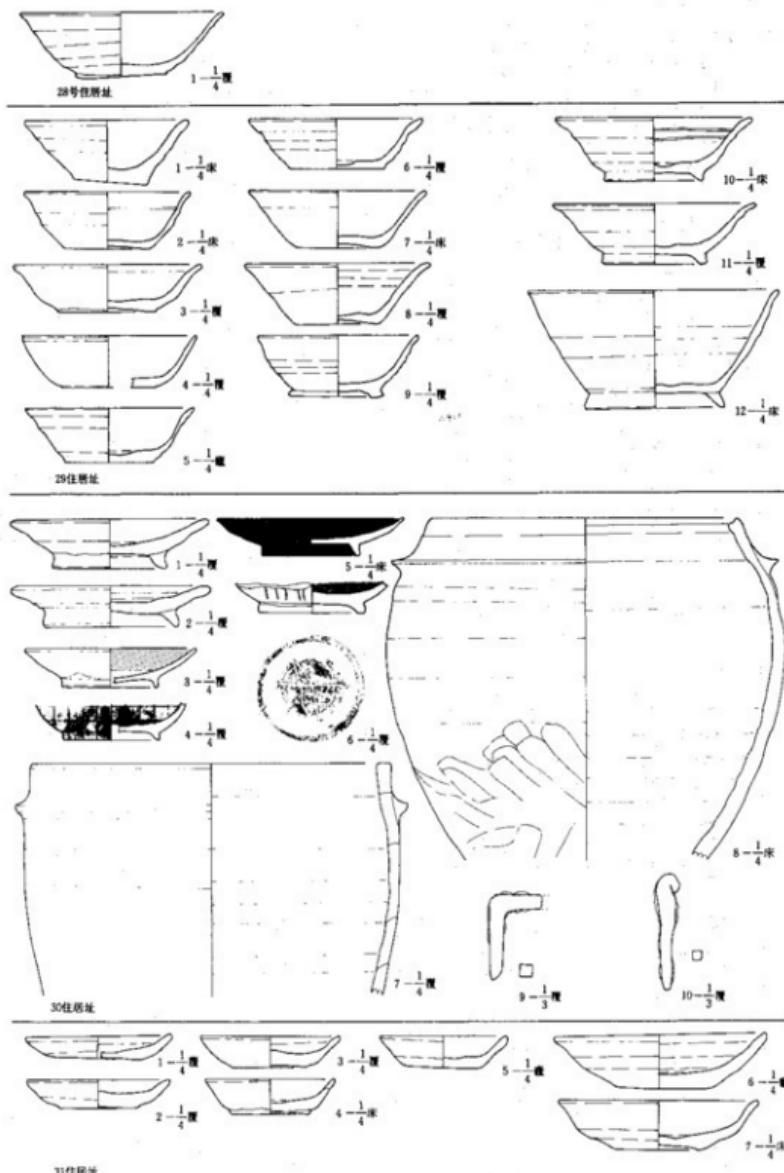
第17圖 16・17・18号住居址出土遺物



第18図 19・20・21・22・23号住居址出土遺物



第19図 24・25・26・27号住居址出土遺物



第20図 28・29・30・31号住居址出土遺物

表2. 住居址出義遺物(1)

住居	No	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1号	1	土師	12.0	3.8	—	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。底部外面指頭によるナデ。底部ケズリ。	明赤橙	砂礫多	酸化	3/4 残
	2	土師	10.0	3.6	7.0	右ロクロ。回転鋸切り。	暗赤橙	赤色粒少	酸化	完形
	3	須恵	14.0	2.3	6.8	右ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	黒色粒多	還元硬質	1/4 残
	4	土師	12.0	4.4	7.0	右ロクロ。回転鋸切り無調整。	黄橙	酸化	完形	
	5	土師	11.4	4.2	6.4	右ロクロ。底部ナデケシ。	淡赤橙	—	酸化	完形
	6	須恵	14.7	4.6	6.4	右ロクロ。回転鋸切り無調整。	淡白	還元軟質	口縁3/4 欠	
	7	灰釉	21.6	—	—	ロクロ剥けぬり。	淡緑色釉	—	還元	口縁1/4 欠
	8	鉄器	—	—	—	大形の刀子。先端部欠損	—	—	—	
	9	鉄器	—	—	—	刀子の切先片。	—	—	—	
	10	鉄器	—	—	—	不明鉄器。板状を呈す。	—	—	—	
	11	石製品	—	—	—	砾石。再利用。	—	—	—	
2号	1	土師	11.0	3.5	—	内面ヨコナデ。外面口縁部ヨコナデ、底部ケズリ。	明赤橙	砂礫多	酸化	1/2 残
	2	土師	11.1	3.4	—	内面ヨコナデ。外面口縁部ヨコナデ、底部ケズリ。	明赤橙	砂礫多	酸化	完形
	3	土師	12.5	3.9	—	内面ヨコナデ。外面口縁部ヨコナデ、底部ケズリ。	明赤橙	砂礫多	酸化	1/2 残
	4	土師	19.0	4.2	—	内面ヨコナデ。外面口縁部ヨコナデ、底部ケズリ。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	5	土師	19.5	—	—	口縁部ヨコナデ。	橙褐	砂礫多	酸化	口縁1/4 残
	6	土師	11.9	3.3	5.4	ロクロ、解剖糸切り無調整。	淡黄橙	砂礫多	酸化	完形
	7	須恵	17.6	5.2	12.4	ロクロ、回転ヘラケズリ。	灰	黒色粒	還元硬質	1/3 残
	8	土師	7.9	1.2	4.9	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂礫多	酸化	完形
	9	土師	8.6	1.9	5.0	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	10	土師	9.1	2.0	5.1	ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	11	土師	8.6	1.9	5.0	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	12	土師	9.3	2.4	5.0	ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	13	土師	9.1	2.1	5.1	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	14	土師	9.6	1.9	5.6	ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	15	土師	9.6	2.2	5.3	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	16	土師	9.4	2.2	5.1	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	17	土師	9.7	2.4	4.9	ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	完形
	18	土師	9.3	4.0	5.8	ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂礫多	酸化	口縁1/4 欠
	19	土師	14.3	5.5	7.2	右ロクロ。内面ミガキ。底部ナデケシ。	浅黄橙	砂礫	酸化	完形
	20	灰釉	12.0	2.4	6.7	つけがけ。重ね焼き。ロクロ。	白色釉	黄白地	還元	口縁1/4 欠
	21	土師	26.4	—	—	口縁部ヨコナデ。胴外面巻位のナデ。胴内面指頭により斜位のナデ。	明赤橙	砂礫多	酸化	口縁1/3 残
	22	土師	18.7	14.8	14.8	口縁部ヨコナデ。胴内面ナデ。胴外面巻位のケズリ後、ナデ。赤ロック。	暗橙褐	礫多	酸化	完形
	23	須恵	—	—	14.0	ロクロ整形後、外縁ナデ。	淡赤橙	雪母多	酸化	口縁欠
	24	土師	24.7	—	—	口縁部ヨコナデ。胴外面上から下へのケズリ。胴内面指頭による横位のナデ。	黒暗赤褐	礫多	酸化	1/4 残
	25	平瓦	—	—	—	凸面は墨文、凹面は布目模。斬轡。	淡灰	礫	還元	
	26	丸瓦	—	—	—	凸面は墨文、凹面は布目模。	淡灰	礫	還元	
	27	丸瓦	—	—	—	凸面は繩叩き後、横位の瓦ナデ。凹面は布目模。	灰白～褐色	礫	還元	
	28	鉄器	—	—	—	性格不明。画面短形を呈す。	—	—	—	

表3. 住居址出義遺物 (2)

住居 号	No.	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
3 号 住 居 址	1	土 部	9.8	2.5	5.8	右ロクロ、静止糸切り無調整。	淡黄橙	砂粒	酸化	1/4 残
	2	土 部	10.2	2.5	5.8	右ロクロ、静止糸切り無調整。	淡黄橙	砂質	酸化	3/4 残
	3	土 部	12.0	4.2	7.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	灰褐	砂粒少	酸化	1/2 残
	4	須 恵	12.8	3.3	6.8	右ロクロ。回転糸切り無調整。	青灰	黑色粒	還元硬質	1/4 残
	5	土 部	15.0	3.7	9.2	ロクロ。回転糸切り無調整。	赤橙	赤色粒	酸化	1/4 残
	6	須 恵	16.0	—	—	ロクロ整形。	暗赤褐	白色粒	還元硬質	破片
	7	青 磁	—	—	—	内面に劃き。同安窯?	黄緑色暗	灰色地	還元	破片
	8	青 磁	—	—	6.8	發物? 同安窯?	黄緑色暗	灰褐色地	還元	破片
	9	軒丸瓦	—	—	—	单弁五葉軒丸瓦瓦当。	灰白	繩	還元	
4 号 住 居 址	1	土 部	12.4	4.0	—	口縁部内面ヨコナギ。外側口縁部ヨコナギ後、体部ケズリ。	明赤橙	砂粒多	酸化	1/3 残
	2	土 部	14.6	5.1	—	口縁部内面ヨコナギ。外側口縁部ヨコナギ後、体部ケズリ。	明赤橙	砂粒多	酸化	口縫1/4 欠
	3	須 恵	9.5	3.3	6.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	黑色粒多	還元硬質	完形
	4	須 恵	12.6	3.3	7.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	黑色粒多	還元硬質	1/4 残
	5	須 恵	13.6	3.6	8.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	黑灰灰白	砂粒多	還元軟質	1/4 残
	6	須 恵	13.6	2.6	7.6	右ロクロ。回転糸切り。	灰白	砂粒少	還元軟質	完形
	7	須 恵	16.0	3.2	—	ロクロ天井部回転施ケズリ。	灰白	繩若干	還元軟質	1/4 残
	8	須 恵	16.8	5.1	—	右ロクロ天井部回転施ケズリ。	灰	繩若干	還元硬質	完形
	9	土 部	8.6	1.7	4.6	ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	砂粒多	酸化	口縫1/4 欠
	10	土 部	9.1	2.4	4.1	ロクロ、回転糸切り無調整。	浅黄橙	砂粒多	酸化	口縫1/4 欠
	11	土 部	9.2	2.5	5.4	ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	繩	酸化	口縫3/4 欠
	12	須 恵	10.8	4.6	6.4	ロクロ。体部下端施削り。回転施切り。	青灰色	黑色粒	還元硬質	口縫3/4 欠
	13	土 部	11.8	4.4	5.7	右ロクロ。回転糸切り無調整。	暗黄橙	砂粒多	酸化	完形
	14	土 部	12.6	5.3	6.6	右ロクロ、回転糸切り無調整。	暗黄橙	砂粒多	酸化	口縫1/4 欠
	15	土 部	13.0	5.0	6.9	右ロクロ、回転糸切り無調整。	淡赤橙	繩	酸化	1/4 残
	16	須 恵	14.0	6.0	8.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	繩	還元硬質	口縫1/2 欠
	17	—	19.1	24.6	6.9	ロクロ整形後、胴部下部を上から下へ のくぎり。	灰白	繩多	還元	完形
	18	鉄 器	—	—	—	性格不明。木質が付着。				
	19	鉄 器	—	—	—	性格不明。刀あるいは鍔か?				
	20	鉄 器	—	—	—	性格不明。鏡の連結				
5 号 住 居 址	1	土 部	10.0	2.5	6.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	明赤橙	砂粒	酸化	1/4 残
	2	土 部	10.4	3.2	4.8	右ロクロ。回転糸切り無調整。	赤橙	砂質	酸化	完形
	3	土 部	10.4	3.5	6.0	右ロクロ。底部不明。	浅黄橙	砂質	酸化	1/2 残
	4	須 恵	12.8	3.2	7.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	黑色粒	還元硬質	口縫1/2 欠
	5	須 恵	13.0	3.7	7.6	右ロクロ。切り離し不明。	灰	黑色粒	還元硬質	口縫1/2 欠
	6	土 部	11.9	5.0	6.8	右ロクロ。底部切り離し後、ナデクシ	暗赤橙	砂粒	酸化	口縫5/6 欠
	7	須 恵	9.4	2.1	5.8	右ロクロ。回転糸切り無調整。	淡白	砂粒	還元硬質	口縫1/2 欠
	8	須 恵	14.6	2.8	8.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	—	—	—	口縫2/3 欠
	9	羽 口	—	—	—	土製羽口の破片である。	淡赤褐	繩	酸化	完形
	10	鉄 器	—	—	—	三角形の板状を呈し、性格は不明。				
	11	鉄 器	—	—	—	釘。太目				
	12	鉄 器	—	—	—	釘。太目				
	13	鉄 器	—	—	—	釘。太目				1/2 残
6 号 住 居 址	1	土 部	16.0	—	—	右ロクロ。回転糸切り後、ナデクシ。	雲母多	酸化	1/4 残	
	2	須 恵	14.8	4.3	6.6	右ロクロ。回転糸切り無調整。	雲母多	還元軟質	破片	
	3	白 磁	12.2	—	—	ロクロ整形。	白色釉	白色地	還元	
	4	鉄 器	—	—	—	釘。太目				
7 号 住 居 址	1	土 部	24.8	—	—	口縁部ヨコナギ、胴内面斜位のナギ。刺	淡赤橙	繩少	酸化	口縫1/4 残
	2	鉄 器	—	—	—	大形の刃子片と思われる。				

表4. 住居址出土遺物 (3)

住居	No	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色	調	胎	土	焼	成	備考
住居	1	土器	13.2	5.0	6.6	左口クロ。底部不明。	淡黄橙	砂礫	酸化	口縁3/4欠			
	2	須恵	16.0	5.4	7.6	右口クロ。回転糸切り離し後、ナダ。	灰白	雲母多	還元軟質	口縁7/8欠			
	3	鉄器	—	—	—	性格不明。断面は長方形。							
	4	鉄器	—	—	—	針。先端が曲がる。							
	5	鉄器	—	—	—	釘。							
	6	鉄器	—	—	—	錐錆の茎部。							
	7	鉄器	—	—	—	刃子。							
	8	鉄器	—	—	—	刃子。切先欠損。							
	9	鉄器	—	—	—	性格不明。棒状を呈す。							
	10	石製品	—	—	—	黒色の石材。圓面が削取り。基石か?							
住居	1	土器	9.2	2.5	5.5	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂礫	酸化	口縁1/4欠			
	2	土器	10.0	2.7	6.3	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂礫	酸化	完形			
	3	土器	9.8	2.8	5.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡赤褐	砂礫	酸化	口縁3/3欠			
	4	土器	10.2	2.9	5.1	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡赤褐	砂礫	酸化	1/4 残			
	5	土器	9.8	2.8	5.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	黑色粒	酸化	口縁3/4欠			
	6	土器	12.3	4.0	5.5	右口クロ。底部糸切り後、ナダタシ。	淡赤褐	砂礫	酸化	口縁3/4欠			
	7	土器	12.5	4.4	7.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂礫	酸化	口縁2/3欠			
	8	土器	12.2	5.5	7.5	右口クロ整形後、ナダ。外周口クロ整形。底部回転糸切り後、ナダ。	淡黄橙	黑色粒 赤色粒	酸化	口縁3/4欠			
	9	鉄器	—	—	—	針か?くの字にまがる。							
	10	鉄器	—	—	—	断先。大形である。							
住居	1	土器	14.8	4.0	—	内面口縁部ヨコナダ後、見込みにラセン状の口縁部に崩れの様子。外側ヨコナダ後体部を施ケツリ。底部ケツリ。	淡黄橙 赤色粒	砂質	酸化	完形			
	2	土器	13.6	3.2	—	口縁部ヨコナダ、内面ナダ。外側体部ケツリ。	赤褐	砂礫	酸化	2/3 残			
	3	土器	12.4	4.1	5.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	黒灰	砂礫	酸化	1/3 残			
	4	須恵	11.9	3.5	4.3	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰	砂礫	還元軟質	1/2 残			
	5	須恵	11.4	4.5	5.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰褐	砂礫	還元軟質	ほぼ完形			
	6	灰陶	13.0	3.8	6.8	底部ナダタシ。崩毛ぬり?重ね燒き。	白色釉	白色地	還元	1/2 残			
	7	灰陶	14.4	4.8	6.0	底部ナダ。つけかけ。重ね燒き。	白色釉	白色地	還元	1/4 残			
	8	白磁	13.4	—	—	欠透有。ロクロ。	白色釉	白色地	還元	破片			
住居	1	土器	8.9	1.7	5.2	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂質	酸化	完形			
	2	土器	9.2	1.7	5.6	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂質	酸化	完形			
	3	土器	8.7	2.1	4.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	黃褐	砂礫	酸化	完形			
	4	土器	8.7	2.2	5.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	暗赤褐	砂礫	酸化	3/4 残			
	5	土器	8.8	2.4	4.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂質	酸化	完形			
	6	土器	14.6	4.1	8.3	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂礫	酸化	3/4 残			
	7	土器	13.1	5.6	5.8	右口クロ。底部ナダタシ。	暗褐	砂礫	酸化	1/2 残			
	8	土器	13.9	—	—	右口クロ。底部ナダタシ。	淡赤褐	砂	酸化	1/4 残			
	9	灰陶	—	—	7.3	右口クロ。底部ナダ。つけかけね。重ね燒き。高台がつぶれる。	白色釉	灰白地	還元	1/2 残			
	10	白磁	—	—	7.6	欠透、貰入有。ロクロ。	白釉	灰褐色	還元	1/4 残			
	11	土器	21.8	20.8	9.9	口縁部ヨコナダ、脚部内面削頭によるナダ。脚部内面上から下へのケツリ。	淡赤褐	纏多 赤色粒	酸化	完形			
住居	1	土器	7.9	2.0	4.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂礫多	酸化	3/4 残			
	2	土器	8.4	1.4	6.0	右口クロ。静止糸切り無調整。	淡黄褐	砂礫多	酸化	1/2 残			
	3	土器	11.9	2.7	—	内面ヨコナダ。口縁部ヨコナダ。体部ケツリ。	棕褐	黑色粒 雲母	酸化	1/4 残			
	4	土器	11.9	3.0	8.3	内面ヨコナダ。外側口縁部ヨコナダ。体部脂跡による押住、底部ケツリ。	明赤褐	砂礫 雲母	酸化	1/4 残			
	5	須恵	11.9	3.3	5.5	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰	砂礫少	還元軟質	1/2 残			
	6	土器	11.6	3.7	6.2	右口クロ。回転糸切り無調整。	明赤褐	砂礫	酸化	1/4 残			
	7	須恵	10.9	3.5	5.6	右口クロ。回転糸切り無調整。	黑灰	黑色粒	還元軟質	1/6 残			
	8	綠釉	11.5	2.0	5.2	みこみに沈緑。ロクロ。	黃綠色釉	褐灰	酸化硬質	口縁3/4欠			

表5. 住居址出土遺物(4)

住居	No.	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
12 号 住 居	9	頸壺	14.7	2.7	8.2	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰	黒色粒	還元燒質	1/6 残
	10	白瓶	15.2	—	—	口クロ。火通有	白色粒	白色粒	還元	破片
	11	土師	21.0	27.9	6.2	口縁部ヨコナダ。胴内面丸ナダ。外面部上部を横のケズり、下部を縱のケズリ。	明赤橙	砂塵	酸化	1/2 残
	12	土師	19.8	—	—	口縁部ヨコナダ。胴内面丸ナダ。外面部上部を横のケズり、下部を縱のケズリ。	明赤橙	砂塵	酸化	1/4 残
	13	鉄器	—	—	—	板状を呈す。性格不明。				
13 号 住 居	1	土師	8.4	2.0	5.6	口クロ。回転糸切り無調整。	赤橙	砂塵	酸化	11縫3/4 欠
	2	土師	9.6	2.0	6.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	砂塵	酸化	1/3 残
	3	土師	9.6	2.0	6.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	中色粒	酸化	1/3 残
	4	頸壺	12.2	3.7	6.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	明灰	砂塵	還元燒質	1/4 残
	5	土師	12.6	4.0	6.4	口クロ。回転糸切り無調整。	暗黄橙	砂塵	酸化	1/4 残
	6	土師	11.0	4.0	6.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	黑灰	砂塵	酸化	口縫1/4 欠
	7	土師	—	—	—	口縁部ヨコナダ、胴内面ヘラナダ。胴外面部ケズリ。	淡赤橙	砂塵	酸化	1/4 残
	8	瓦	—	—	—	凸面横筋のナダ。凹面布目	灰	砂塵	還元燒質	
14 号 住 居 址	1	土師	11.8	3.1	—	口縫一内面ナダ。外面部ケズリ。	明赤橙	纏多	酸化	1/4 残
	2	土師	8.4	2.1	4.2	口クロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	雲は多	酸化	完形
	3	土師	12.2	—	—	全面にヘラミガキ	黑色	砂塵少	酸化	1/6 残
	4	土師	10.4	3.7	6.8	右口クロ。底部ナデケシ。	淡黄橙	砂少	酸化	11縫3/4 欠
	5	土師	15.0	—	—	右口クロ。	明赤橙	砂塵	酸化	底部欠
	6	土師	13.8	—	—	右口クロ。底部ナデケシ。	灰褐	砂少	酸化	底部欠
	7	土師	12.8	5.2	8.4	右口クロ。底部ナデケシ。	淡黄橙	砂塵	酸化	1/2 残
	8	頸壺	15.8	5.9	8.0	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰	黑色粒	還元燒質	完形
	9	土師	15.2	—	—	右口クロ。底部不明。内面ミガキ内黒。	明赤橙	砂塵	酸化	底部欠
	10	灰釉	16.8	2.5	5.8	沈縫。右口クロ。回転糸切り無調整。つけかけ。煮ね焼き。	白色粒	灰褐地	還元	11縫1/6 欠
	11	頸壺	13.4	2.8	7.7	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	纏少	還元燒質	11縫1/3 欠
	12	土師	25.0	—	—	口縁部ヨコナダ、胴内面上面から下へのケズリ。内面底部によるナダ。	淡黄褐色	纏	酸化	1/4 残
	13	瓦	—	—	—	凹面布目痕。凸面裏文。刻書「大千」	灰	纏	還元燒質	
	14	瓦	—	—	—	凹面布目痕。凸面裏文。斜位の丸ナダ。	灰白	纏	還元燒質	
	15	瓦	—	—	—	裏面に布目痕。瓦当。	淡赤橙	纏	酸化	
	16	土製品	—	—	—	土錐。	赤橙	砂	酸化	
	17	石製品	—	—	—	砾石。				
15 号 住 居 址	1	土師	10.8	3.8	5.7	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂塵	酸化	1/6 欠
	2	土師	10.7	3.2	5.4	右口クロ。回転糸切り無調整。	黑白	黑色粒	酸化	完形
	3	土師	10.0	4.4	4.3	口クロ。回転糸切り無調整。	淡赤橙	黑色较少	還元燒質	13縫3/4 欠
	4	土師	9.9	3.4	5.0	口クロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂塵	酸化	3/4 残
	5	土師	9.7	3.4	5.5	右口クロ。回転糸切り無調整。	黑灰	砂地區	酸化	口縫1/4 欠
	6	土師	11.7	4.5	6.5	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂塵	酸化	完形
	7	土師	10.7	4.5	6.5	右口クロ。底部ナデケシ。	淡黄橙	砂質	酸化	3/4 残
	8	縫縫	12.6	4.4	7.6	口クロ。回転糸切り無調整。トチナ横。	淡绿色粒	灰色地	還元	1/4 残
	9	灰釉	16.8	6.8	8.2	煮ね焼き。つけかけ。回転糸切り無調整。優秀。	白色粒	白色地	還元	1/2 残
	10	鉄器	—	—	—	釘。くの字に曲折する。				
	11	鉄器	—	—	—	釘。くの字に曲折する。				
	12	鉄器	—	—	—	刀子。茎が広い。				
16 号 住 居 址	1	土師	10.8	2.9	4.6	口クロ。回転糸切り無調整。	暗褐	纏多	酸化	劣残
	2	土師	11.0	3.0	5.4	口クロ。回転糸切り無調整。	暗赤橙	砂塵	酸化	劣残
	3	土師	11.0	3.5	6.0	口クロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂塵	酸化	劣残
	4	灰釉	13.7	2.2	7.3	つけかけ。煮ね焼き。底部ナダ。	淡綠色粒	灰色地	還元燒質	1/4 残

表 6. 住居址出義遺物 (5)

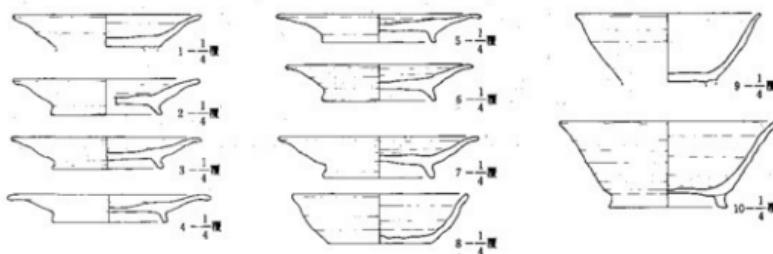
住居	No	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	その他の
17 芳住居址	1	土師	8.3	2.3	4.8	ロクロ。回転糸切り無調整。	黄橙	砂礫	酸化	口縁1/3 欠
	2	土師	9.2	2.3	5.1	ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	礫	酸化	完形
	3	土師	8.4	2.3	5.2	右ロクロ。回転糸切り無調整。	暗褐色	砂礫	酸化	汚欠
	4	土師	11.7	3.4	6.0	左ロクロ。回転糸切り無調整。	灰褐	砂礫	酸化	汚残
	5	土師	13.4	4.8	8.1	右ロクロ。底部ナデケン。	黑灰	砂礫	酸化	汚残
	6	土師	14.1	5.7	8.0	ロクロ。底部ナデケン。	黄橙	赤色粒	酸化	汚残
	7	土師	14.2	5.0	8.7	右ロクロ。底部ナデケン。	黄橙	赤色地	酸化	汚残
	8	土師	15.3	5.4	8.7	右ロクロ。底部不明。	暗黃橙	礫	酸化	汚残
	9	綠釉	—	—	7.4	回転糸切り無調整。	濃綠色釉	灰色地	還元硬質	底部片
	10	土師	7.6	—	—	全面にミガキ。三足欠損	黑色	砂粒	還元	汚残
	11	須恵	—	—	—	獸耳のみ。ケズリ。	明灰色	黑色粒	還元硬質	脚部片
	12	須恵	26.3	—	—	ロクロ。	灰褐	礫	還元硬質	汚
	13	瓦	—	—	—	凹面に布目痕。凸面に横位の亀ナデ	灰白	礫	還元硬質	3/4
	14	瓦	—	—	—	裏面に布目痕。瓦当。	灰	礫	還元硬質	1/4
	15	鉄器	—	—	—	釘頭部。				
	16	鉄器	—	—	—	釘頭部。				
	17	鉄器	—	—	—	刀子か?				
18 芳住居址	1	土師	10.0	3.3	4.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	暗黃橙	砂少	酸化	
	2	須恵	12.0	3.3	5.8	右ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	礫少	還元軟質	
	3	土師	10.2	3.8	5.2	ロクロ後、内面ミガキ。底部ナデケン。	橙、内黒	砂礫	酸化	
	4	須恵	14.8	5.7	7.5	ロクロ。回転糸切り無調整。	灰白	雲母	還元軟質	
19 居住	1	土師	12.0	4.8	5.3	右ロクロ。底部ナデケン。	暗褐	雪母	酸化	口縁1/4 欠
	2	土師	15.5	—	—	右ロクロ。底部ナデケン。	黄橙	砂礫	酸化	高台欠
20 芳住居址	1	土師	8.3	1.9	5.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	赤色粒	酸化	完形
	2	土師	8.4	2.0	4.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	礫	酸化	口縁1/3 欠
	3	土師	8.4	2.1	4.2	右ロクロ。回転糸切り無調整。	橙褐	礫	酸化	一部欠
	4	土師	8.8	2.6	3.8	右ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	黑色粒	酸化	口縁1/4 欠
	5	土師	13.2	4.0	7.0	右ロクロ。回転糸切り無調整。	暗褐色	砂礫多	酸化	1/3 残
	6	土師	15.0	3.4	8.0	右ロクロ。回転糸切り無調整。	暗黃橙	礫多	酸化	1/4 残
	7	土師	15.2	5.7	7.0	右ロクロ。回転糸切り無調整。	黄橙	礫	酸化	口縁2/3 欠
	8	土師	14.9	5.6	8.3	ロクロ後、見込みにナデ。底部不明。	暗橙褐	礫	酸化	3/4 残
	9	灰釉	12.6	2.3	6.6	底部不明。重ね焼き。底部ナデ。	綠白色釉	白色地	還元	1/6 残
	10	青釉	—	—	6.4	ロクロ。見透り有。	青白色釉	灰白地	還元	破片
	11	青釉	—	—	—	ロクロ。貫入有り。	黃綠色釉	灰褐色地	還元	破片
21 芳住居址	1	土師	8.1	2.1	5.0	右ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	赤色粒	酸化	1/2 残
	2	土師	9.0	2.2	6.0	右ロクロ。回転糸切り無調整。	明黃橙	赤色粒	酸化	1/4 残
	3	土師	15.9	3.9	8.0	右ロクロ。回転糸切り無調整。	明赤橙	砂	酸化	1/4 残
	4	鉄器	—	—	—	性格不明。鋸かもしれない。				
	5	鉄器	—	—	—	性格不明。形状もサビがひどく不明。				
22 芳住居址	1	土師	9.4	2.3	6.0	ロクロ。静止糸切り無調整。	淡赤橙	砂	酸化	口縁1/3 欠
	2	須恵	12.2	3.7	5.8	ロクロ。回転糸切り無調整。	灰褐	雪母	還元軟質	1/4 残
	3	灰釉	—	—	7.3	つけかけ。重ね焼き。底部ナデ。	白绿釉	褐灰地	還元	口縁3/4 欠
	4	灰釉	12.5	2.3	6.4	つけかけ。重ね焼き。底部ナデ。	白色釉	褐色地	酸化	底部のみ
	5	綠釉	—	—	6.8	ロクロ	綠色釉	褐色地	酸化	底部のみ
	6	綠釉	—	—	9.0	貫入? ロクロ。	绿色釉	灰色地	還元	底部のみ
	7	鉄器	—	—	—	釘か?				
	8	土製品	—	—	—	須恵片面利用。				
	9	鉄器	—	—	—	筋織車。				

表7. 住居址出義遺物(6)

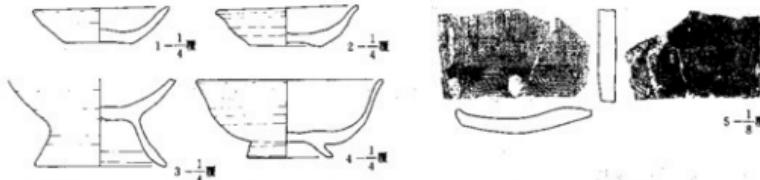
住居 分類	No.	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	その他の
23号住居址	1	土師	9.5	1.5	7.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂質	酸化	1/3 残
	2	土師	13.8	4.1	5.4	右ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	砂	酸化	口縁1/3欠
	3	土師	9.5	3.5	5.5	ロクロ後、内面ミガキ。内黒。底部ナデケシ。	浅黄橙	難少	酸化	完形
	4	土師	13.2	5.9	7.4	ロクロ。底部不明。	浅黄橙	砂礫	酸化	1/2 残
	5	灰釉	15.8	6.6	7.4	右ロクロ。口縁内面に沈線。底部ナデケシ。	白色釉	灰褐地	還元	1/6 残
	6	—	—	—	—	釘。まがっている。				
	7	—	—	—	—	釘。まがっている。				
	8	—	—	—	—	釘。				
	9	—	—	—	—	鉢。10と同一個体と思われる。				
	10	—	—	—	—	鉢。9と同一個体と思われる。				
24号住居址	1	灰釉	13.5	4.3	7.2	重ね焼き。つけかけ。底部ナデ。	綠白色釉	灰白色地	還元	口縁3/4欠
	2	土師	21.8	—	—	口縁ヨコナデ。内面ヘラナデ。胴外面上位斜のケズリ、下位縱位のケズリ	赤橙	砂質	酸化	1/4 残
	3	鐵器	—	—	—	釘。				
	4	鐵器	—	—	—	釘。まがっている。				
	5	鐵器	—	—	—	性格不明。サビにより形状不明。				
	6	鐵器	—	—	—	刀子か?。袖闇がみられる。				
	7	銅製品	—	—	—	蛇尾。黒色の付着物がみられる。				
	8	銅製品	—	—	—	銅鏡。3点小片に推定復元。				
25号住居址	1	土師	8.8	3.3	4.6	ロクロ。回転糸切り無調整。	暗黄橙	赤色粒	酸化	1/4 残
	2	須恵	12.4	3.8	7.4	ロクロ。底部ナデ。	灰	雲母	還元軟質	1/4 残
	3	須恵	23.4	—	—	ロクロ。	暗灰色	完形も	還元軟質	口縁1/4欠
	4	鐵器	—	—	—	釘。				
	5	鐵器	—	—	—	釘。				
	6	鐵器	—	—	—	釘。				
	7	鐵器	—	—	—	釘。				
	8	鐵器	—	—	—	釘。				
	9	鐵器	—	—	—	釘。				
	10	鐵器	—	—	—	性格不明。コの字形を呈す。				
26号住居址	1	土師	9.7	3.2	5.1	右ロクロ。回転糸切り無調整。	黃白色	赤色粒	酸化	口縁1/3欠
	2	土師	10.3	3.8	5.3	右ロクロ。回転糸切り無調整。	暗黄橙	赤色粒	酸化	口縁3/4欠
	3	土師	10.7	4.3	5.8	ロクロ。底部ナデ。	淡赤橙	難	酸化	口縁1/4欠
	4	土師	16.1	—	—	ロクロ。底部ナデ。	橙褐	赤色粒	酸化	口縁7/8欠
	5	土師	17.8	—	—	ロクロ整形後、外面胴部を下から上へのケズリ。	明赤褐	砂粒	酸化	1/3 残
27号住居址	1	土師	13.0	4.2	—	ロクロ後、体部下端回転ヘラケズリ。内黒。	明黄橙	雲母	酸化	1/4 残
	2	土師	17.6	—	—	口縁部ヨコナデ。内面ヘラナデ。胴部外面右から左のケズリ。	赤橙	難	酸化	1/6 残
	3	鐵器	—	—	—	性格不明。棒状を呈す。				
28号住居址	1	須恵	14.2	4.5	6.2	右ロクロ。回転糸切り無調整。	明灰	難	還元硬質	完形
	2	—	—	—	—					

表8. 住居址出義遺物(7)

住居 号	No	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
29 号 住 居 址	1	土師	11.6	4.3	5.2	右口クロ。縫合糸切り無調整。	黄橙	砂粒	酸化	口縁1/8 欠
	2	須恵	11.8	4.0	6.0	口クロ。回転糸切り無調整。	暗灰	雲母	還元軟質	口縁3/4 欠
	3	須恵	13.4	3.3	7.0	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	砂粒	還元軟質	1/3 残
	4	須恵	12.2	3.6	6.6	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	砂粒	還元軟質	1/4 残
	5	須恵	11.8	3.8	6.2	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰褐	雲母	還元軟質	口縁1/2 欠
	6	須恵	12.2	3.5	6.5	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	雲母	還元軟質	1/2 残
	7	須恵	12.4	4.0	5.8	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	雲母	還元軟質	口縁1/2 欠
	8	須恵	13.0	4.2	5.6	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	雲母	還元軟質	完形
	9	土師	11.8	4.0	6.0	口クロ。底部ナデ。	赤橙	纏	酸化	口縁1/3 欠
	10	須恵	13.6	4.4	6.8	口クロ。回転糸切り無調整。	灰	雲母	還元軟質	口縁1/2 欠
	11	須恵	14.2	4.2	7.2	右口クロ。底部ナデ。	黑灰	雲母	還元軟質	口縁7/8 欠
	12	須恵	17.4	8.2	9.8	口クロ。回転糸切り後、ナデ。	灰	砂質	還元軟質	一部欠
30 号 住 居 址	1	須恵	13.4	3.4	7.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰	砂粒	還元硬質	口縁3/4 欠
	2	須恵	13.3	2.9	8.3	右口クロ。回転糸切り無調整。	黑灰	砂質	還元軟質	1/4 残
	3	灰釉	11.9	2.7	6.8	つけかけ。東ね焼き。底部回転ケズリ。	綠白色繪	灰白色地	還元	1/9 残
	4	綠釉	—	—	6.6	回転糸切り無調整。見込みに旋線。	綠色繪	灰色地	還元軟質	底部片
	5	綠釉	12.9	2.6	6.8	底部回転ヘラケズリ。トチン痕有り。内面ミガキ。体部回転ヘラケズリ。	綠色繪	灰色地	還元軟質	1/3 残
	6	土師	—	—	7.3	口クロ後、内面ミガキ。内墨。底部ナデ。底部にヘラガキ。胴部に旋線。	橙褐	砂	酸化	底部片
	7	土師	24.9	—	—	口クロ後、胴下部外面を上から下へのケズリ。	暗赤橙	纏	酸化	1/4 残
	8	土師	21.3	—	—	口クロ後、胴下部外面を左上から右下へのケズリ。	赤橙	砂	酸化	1/3 残
	9	鉄器	—	—	—	釘あるいは鍔。				
	10	鉄器	—	—	—	釘。				
31 号 住 居 址	1	土師	10.1	2.0	6.0	口クロ。回転糸切り無調整。	明赤橙	砂質	酸化	1/4 欠
	2	土師	—	—	—	口クロ。回転糸切り無調整。	橙褐	砂質	酸化	口縁1/2 欠
	3	土師	—	—	—	口クロ。回転糸切り無調整。	明赤橙	赤色粒	酸化	一部欠
	4	土師	—	—	—	口クロ。回転糸切り無調整。	橙褐	砂粒	酸化	口縁2/3 欠
	5	土師	—	—	—	口クロ。回転糸切り無調整。	浅黃橙	赤色粒	酸化	完形
	6	土師	—	—	—	右口クロ。回転糸切り無調整。	暗橙褐	砂質	酸化	完形
	7	土師	—	—	—	右口クロ。回転糸切り無調整。	暗褐	砂質	酸化	口縁2/3 欠



2号土塙



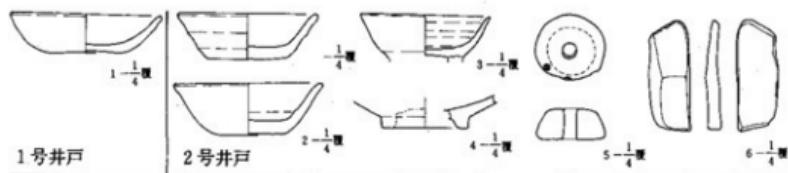
13号土塙

第21図 2-13号土塙出土遺物

### 第3節 土塙・井戸の出土遺物

表9・土塙出土遺物

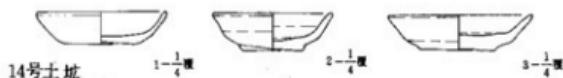
土塙	No.	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
2号	1	頬 恵	13.2	—	—	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰	砂	還元硬質	高台欠
	2	頬 恵	13.0	2.5	7.8	ロクロ。回転糸切り無調整。	黒灰	黒色粒	還元硬質	1/4 残
	3	頬 恵	13.4	2.2	7.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	灰白	砂	還元硬質	2/3 残
	4	頬 恵	14.2	1.9	8.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	灰	砂	還元軟質	1/4 残
	5	頬 恵	14.2	2.0	8.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	青灰	砂標	還元硬質	1/4 残
	6	頬 恵	13.0	2.5	8.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	灰白	砂	還元硬質	1/4 残
	7	頬 恵	14.0	2.9	7.8	ロクロ。回転糸切り無調整。	黒灰	黒色粒	還元硬質	1/3 残
	8	頬 恵	12.4	3.5	7.0	ロクロ。回転糸切り無調整。	青灰	砂	還元硬質	1/4 残
	9	頬 恵	12.8	—	—	右口クロ。回転糸切り無調整。	明灰	砂質	還元硬質	口縁7/8 欠
	10	土 師	15.0	6.0	8.2	ロクロ。回転糸切り無調整。	黄橙	砂標	酸化	1/4 残
12号	1	土 師	9.6	2.4	4.8	右口クロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	砂	酸化	完形
	2	土 師	9.7	2.6	5.1	ロクロ。回転糸切り無調整。	浅黄橙	砂	酸化	完形
	3	土 師	—	—	9.2	右口クロ。底部ナデグシ。	浅黄橙	砂標	酸化	肩のみ
	4	土 師	12.9	5.4	6.0	右口クロ後、内面ミガキ。底部ナデグシ。	暗赤橙	砂標	酸化	2/3 残
14号	1	土 師	9.0	2.2	4.8	ロクロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂	酸化	1/4 残
	2	土 師	10.0	2.5	5.2	ロクロ。回転糸切り無調整。	淡黄橙	砂	酸化	2/3 残
	3	土 師	8.3	2.6	4.2	右口クロ。回転糸切り無調整。	淡赤橙	砂	酸化	1/4 残



1号井戸



2号井戸



3号井戸

第22図 1・2・3号井戸 14号土塙出土遺物

表-10. 井戸出土遺物

井戸	No	器種	口径	器高	底径	成・整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1号	1	土師	10.4	2.7	5.0	右クロ。回転糸切り無調整。	淡赤橙	赤色粒	難	口縁1/3欠
2号	1	土師	9.5	3.2	5.3	ロクロ。回転糸切り無調整。	赤橙	赤色粒		ほぼ完形
	2	土師	10.2	3.1	5.3	ロクロ。回転糸切り無調整。	赤橙	砂礫		ほぼ完形
	3	土師	8.9	—	—	ロクロ。回転糸切り無調整。	暗赤橙	砂礫		高台欠
	4	白磁	—	—	5.9	貫入。欠透。ロクロ。	黄白色釉	白色地	灘元	破片
	5	石製品	—	—	—	紡錘車。側面に円形の刻線2個有り。				
	6	石製品	—	—	—	砥石				
3号	8	青磁	13.9	—	—	ロクロ。	綠白色釉	砂	灘元	破片

## 第VI章 ま と め

天神遺跡は、推定国府域の南西部に位置する。今回の調査で国府跡に直接係わる遺構は検出されなかったが、奈良・平安時代にかけて営まれた住居址が密集して検出された。周辺には中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡等が所在しており、当地域において奈良・平安時代にかけて集落が拡大した様子が理解される。

検出された遺構総数は、住居址32軒、土塹14基、井戸址3基である。調査面積1600m<sup>2</sup>に対する遺構の分布密度は極めて高い。

住居址は調査区の西側に集中して分布する。平面形は長方形若しくは方形を呈する。規模は東西4.5m前後、南北3.5m前後を計るものが多い。柱穴は無いもののがほとんどである。カマドは東壁の中央南寄りに位置し、煙道は壁外に長く伸びるもののが一般的であるが、全体的に遺存状態は良くない。

検出された遺物は多種多様で、土師器、須恵器、施釉陶器、輸入陶器、瓦、金属製品、土製品、石製品が出土している。

輸入陶器は3号住居址(7・8)、6号住居址(3)、10号住居址(8)、11号住居址(10)、12号住居址(10)、20号住居址(10・11)、3号井戸(1)から出土している。この内、20号住居址の10は蛇目高台をもつことから白磁碗I類と考えられる。6号住居址3、10号住居址8、12号住居址10はともに口縁部で、小さな玉縁口縁を呈し、やや黄色味をもつ白色釉を呈すことから白磁碗II類と考えられる。11号住10は黄白色の釉で、体部が直線に立ち上がり、見込みが水平となっている白磁碗で、種類あるいはIV類と考えられる。3号住居址7・8、20号住居址11は黄緑色の釉をもつ青磁で同安窯系と推定される。3号井戸は緑灰色釉の端反口縁をもつ碗で、越州窯系の可能性がある。以上の輸入陶器はその搬入時期より2群に分かれ、12世紀初頭以前に流入したと思われる白磁碗I・II類と越州窯系青磁、12世紀中葉から13世紀前半にかけて流入する同安窯系となる。このように本遺跡における輸入陶器は12世紀初頭以前と12世紀後半以後に分かれ、12世紀前半が空白となっている。また、本遺跡では西日本の12世紀代に輸入陶器の中で大きな割合を占める白磁碗IV類の明確な出土が認められることからも輸入陶器の空白時期が推定できる。この点、関東地方では輸入陶器が11世紀後半から12世紀前半にかけて搬入されていないという研究と良く一致している。

土師器・須恵器は時期的には9世紀-11世紀までの遺物が確認されており、本遺跡における最末期の土器群はあるいは12世紀代に位置づけの可能性が考えられる。この最末期の土器群は31号住居址に代表され、皿形土器に特徴が認められる。この皿形土器は器肉が厚く、特に底部において1cm程度あり、口縁部から見込みまでの深さが浅い特徴をもっている。

施釉陶器は灰釉および綠釉が認められる。灰釉陶器はK-14号窯式が少数認められる他に大厚2号および虎渓山1号窯式が主体を成し、丸石2号窯式も比較的多く確認されている。また、綠釉陶器は釉が底部外面まで施釉される例と底部に回転糸切り痕を残し無釉となる例が認めら

れ、数型式に渡ると思われる。

瓦は平瓦、丸瓦、軒丸瓦が少量出土している。軒丸瓦は山王廃寺に認められる異形文と五葉連華文が認められ、この他に図示していないが、国分寺系も存在する。

金属製品は釘、鎌、鍔、筋錐車、刀子、銅碗、鉈尾など豊富な内容を示している。中でも釘の出土はかなり多い。銅碗は破片として出土しており、破片同志の接合は認められない。

土製品には土錐と羽口が出土した。羽口は破片であるが、調査区内より多くのスラグか検出されていることにより近隣に製鉄関連遺構の存在が推定される。

石製品には砾石、筋錐車が検出されており、この他に墓石の可能性が推定される製品が存在する。これは黒色を呈す薄い石材を用いており、石材の側面を面取りして円盤状にしている。平安時代の墓石は栃木県下の遺跡で竪穴住居址床面より白と黒かそろって出土しており、関東において平安時代に存在することが確かめられている。この例から、本遺跡出土の墓石状の石製品も墓石としての可能性が充分推定される。

最後に、本遺跡より見た国府域内の変遷を見る。本遺跡では9世紀代より集落としての発展が認められ、11世紀末葉あるいは12世紀代の一部まで住居址が構築されつづけている。また、輸入陶器を見る限り、12世紀後半から13世紀前半にかけて出現する同安窯系の青磁も存在し、有力な人間の介在が示される。以上のように古代末期において国府としての機能が停止した後も都市的な要素を保持していたと推定される。

# 写 真 図 版





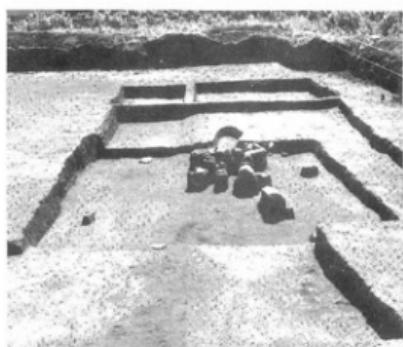
遺跡全景（東から西）



遺跡全景（西から東）



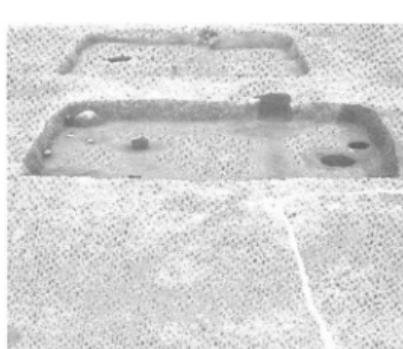
1号住居址



2号住居址



2号住居址出土遺物



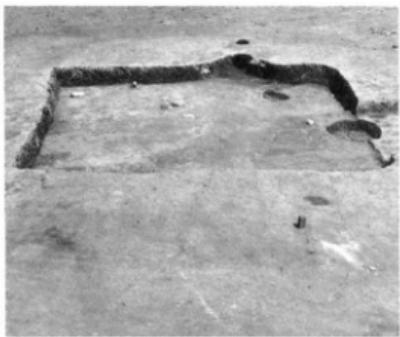
3号住居址（上）・4号住居址（下）

図版 2

遺構



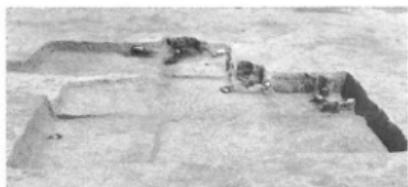
5号住居址



7号住居址



8号住居址



6号住居址（上）・9号住居址（下）



9号住居址出土遺物



12号住居址（下）・13号住居址（上）



14号住居址



18号住居址



22号住居址（左）・29号住居址（右）



23号住居址（左）・24号住居址（右）



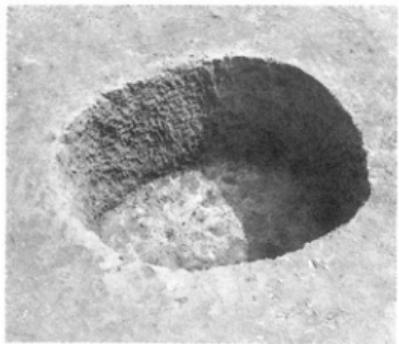
30号住居址



31号住居址

図版 4

遺構



1号土塚



13号土塚



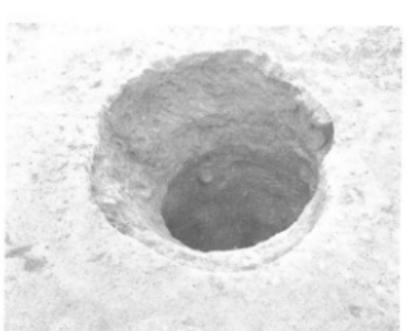
14号土塚



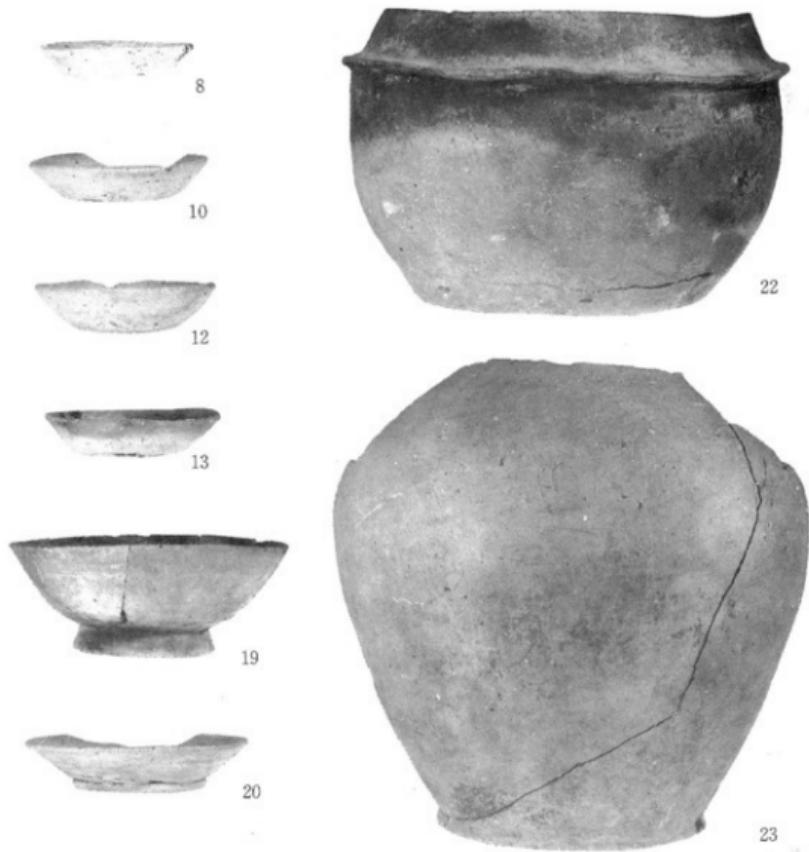
1号井戸址



2号井戸址



3号井戸址



2号住居址出土土器



4号住居址出土土器

図版 6

遺物  
(土器)



8



17

4 住居址出土土器



1



2



3



5



7



8



9



10

11号住居址出土土器



11

11号住居址出土土器



8



10



11

14号住居址出土土器



2



3



5



6



8

15号住居址出土土器

図版 8

遺物  
(土器)



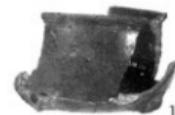
1



2



3



10

17号住居址出土土器

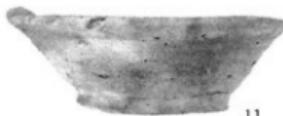


1

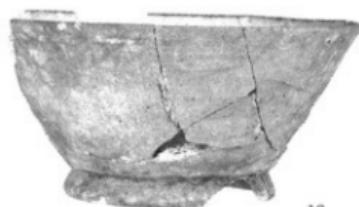


3

22号住居址出土土器



11



12

29号住居址出土土器



5



6



1

3

30号住居址出土土器

31号住居址出土土器



5



6



7

31号住居址出土土器



8

1号住居址出土鉄器



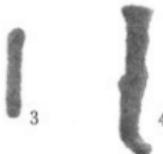
20

4号住居址出土鉄器



13

5号住居址出土鉄器



3

4

5



7

8

9

8号住居址出土鉄器



10

9号住居址出土鉄器



4



6



8



9



9



10

12

15号住居址出土鐵器

21号住居址出土鐵器

23号住居址出土鐵器



7



8



8

24号住居址出土鐵器



8



10

25号住居址出土鐵器



3

27号住居址出土鐵器



10

8号住居址出土石製品



群馬県前橋市天神遺跡発掘報告書

印刷 昭和62年3月24日  
発行 昭和62年3月25日  
編集 山武考古学研究所  
発行 前橋市教育委員会  
前橋市埋蔵文化財調査団  
印刷 (株)文化総合企画  
製本 0476(24)1563

